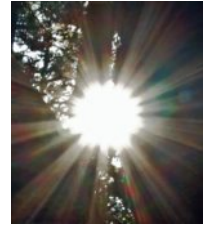




れん ち
恋知

わたしの生を輝かす営み



第1章 天皇制ってなんだろう
私の経験から考える

第2章 恋知とは何か
Love of thinking



2013年10月 9日

武田 康弘

白樺教育館

<http://www.shirakaba.gr.jp/>

2021年 2月 14日新装初版第3刷

第1章 天皇制ってなんだろう ―わたしの経験から考える。

- | | |
|------------------------|--------|
| (1) はじめに | 1 ページ |
| (2) 「建国 !? 記念日」に | 4 ページ |
| (3) 個人の内面世界は、愛国思想に犯された | 8 ページ |
| (4) 形と序列、二つの言葉に収まる | 10 ページ |
| (5) 1章おわり――まとめ | 15 ページ |

(2013年2月7日～3月6日)

第2章 ^{れんち}恋知とは何か Love of thinking

- | | |
|--------------------------|--------|
| (1) 概括 | 17 ページ |
| (2) 「ネオテニー」という特性と「恋知」の営み | 20 ページ |
| (3) 愛情と理性。エロース | 27 ページ |
| (4) 哲学から恋知へ | 31 ページ |
| (5) まとめ | 38 ページ |

(2013年6月1日～9月25日)

付録：「恋知」ポスター 47 ページ

(画と書・本村典子)

『恋知』 — 「私」の生を輝かす営み

第1章 天皇制ってなんだろう —わたしの経験から考える

(1) はじめに

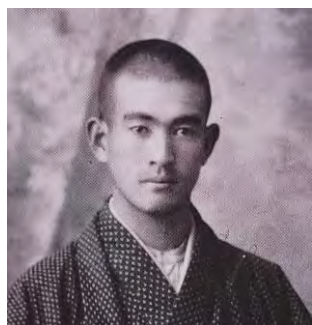
2013-02-07

わたしは、近々お爺さんになりそうです。うむ、おじいさん、という言葉はあまりよい響きではないですね。grandfather とでも言いましょうか。でも、わたしは、ほんとうはグランドボーイでありたいと思っているのです。恋知(哲学)の営みは、少年のごとくですから。

わたしが、これから語ろうと思うのは、小学生のころから疑問に感じてきた天皇とか皇室という制度のことです。まさにboyの心に浮かんだことをグランドボーイのいまのわたしが純粋な心のままに深めてみようと思います。

わたしたちの国では、不思議なことに天皇や皇室について考え・語ることはほとんどなく、ましてその制度を批判的に考え・語ることはタブー視されてきたようです。でも、古代の天皇制律令政治の時代ならまだしも、近代民主主義の現代においてなお語りえぬタブーがあるとしたら、ひどく不健康な社会ということになってしまいます。わたしは、不健康は誰にとってもよくないと思いますので、健康な少年の心を失わずに語ってみようと思います。

2、3年前のことでしたが、教え子の小学生の典ちゃんが、「どうしてあいこさまなの？のりと同じ年なのに、へんよ。」と言いました。まさか「皇室に生まれた子は特別な人なので『さま』と言うの、あなたは、ふつうの家の子だから『ちゃん』なの。」と言うわけにはいきません。「うん、確かにおかしいよね、あいこちゃんというべきだと思うけど、天皇は神のようなものという古い日本の考えがなかなか変わらないのでね。」と応えましたが、あなたならどう答えられますか？



志賀直哉1905年
(明治38年)

同じ疑問を後に「小説の神様」と呼称された白樺派の志賀直哉は、大学時代のノートに記しています。1906年(明治39年)、23歳の時です。

「天皇とは一体なんだろう？ どうして何の為に出来たのだろう？ 誠に妙なものだ。こんな奇妙なものがなければならぬのかしら？ 天皇というのは恐らく人間ではあるまい、単に無形の名らしい。その名がそんなにありがたいとは実に可笑(おか)しい その

無形の名の為に死し、その為に税を納めて。その名の主体たる、一つの平凡なる人間を及びその一族(交際する事以上何事も知らぬ。交際せんが為に生まれて来た人間)をゼイタクに遊ばせて加えてそれを尊敬する、何の事か少しも解らぬ、そういう人から爵位をもらって嬉しがる、嬉しがって君のためなら何時でも死す、アア、実に滑稽々々(こっけい こっけい)。……」

この後もかなり続き、

「天皇廃止論をして国家の敵！！！！になり暗殺されるが、僕に同情するものは一人もいない」という話と、「そういう筋で小説を書き、発行・発売禁止となり裁判になるが、僕は親友の法律家と共に裁判で警察をやっつける、愉快だな。……しかし世間の同情を失い、迫害が来る。僕の子どもまでが小学校から退学させられてしまう。……」(『志賀直哉全集』補巻5・岩波書店)

と書かれています。

以上は、政治には疎く社会思想には興味を持たなかった志賀直哉の「明治天皇から始まった近代天皇制」への嫌悪感の表出ですが、志賀は他の白樺のメンバーと同じく皇室の藩屏(はんぺい、皇族を守り育てる)としてつくられた学習院で学びましたので、日々、皇族と接しているの率直な思いだったようです。

すなおで純粋な心の小学生や、全身が鋭利な感覚神経のような若き志賀直哉が異議を唱えた天皇・皇室という存在について、千代田区神田に生まれ育ったわたし(学校は越境入学で文京区でしたが)もまた、皇居前を通るたびにヒドイ違和感を覚えたものです。日比谷の子ども図書館に行く途中、いつも、なぜ一つの家族がこんなに広い場所を占有しているのか？と気持ちが悪くなりました。小学校で『皇居』は知将の太田道灌が建てた『江戸城』のことだと教わっていましたから、「天皇家とは何の関係もないのにおかしい！天皇が中心の『大



神輿の一部・1968年5月、
神田祭りの日に武田撮影

日本帝国憲法』から国民主権の『日本国憲法』に変わったのに、いつまでも居続けるのは許せない」と友人と話し、「天皇一家は京都に帰り、江戸城はみんなが遊べる公園にすべし！」と幼いながら正論を吐きました。

少し脱線しますが、戦後はじめての神田祭りの日に神田で生まれたわたしは、お宮参りも七五三も結婚式もみな神田明神(かんだみょうじん)で行いました。

神田明神は将門を祀った神社です。関東地方では一番

人気の平将門は、日本の歴史上はじめて京都の天皇に反旗を翻し、自ら新皇を名乗った民衆の英雄でした。彼は、下総国石井(現・茨城県岩井)で朝廷側に敗れてさらし首にされましたが、伝説では、その首を京都からひそかに縁者が持ち帰り、残党狩りの厳しい下総を避けて現在の大手町に葬ったとされます。それがいまでも残る将門塚です。将門死後360年に時宗の真教上人(他力念仏門・法然の孫弟子で一遍を継いで踊念仏を広めた・徹底した民衆主義の遊行僧)が「蓮阿弥陀仏」(れんあみだぶつ)という法号を与え、供養し、その霊を祀るために荒れ果てた社を改修して「神田明神」としました。神社は、徳川家康が江戸城に入った時に現在の場所に移転しましたが、塚だけはそのまま残されました。ここから不思議なことが起きます。



茨城県坂東市岩井の将門を祀る『国王神社』1996年8月武田撮影

関東大震災の時、この塚は崩れ同じ敷地にあった大蔵省庁舎も全焼しましたが、復興の時に塚を取り崩し池を埋めて仮庁舎を建てたところ、大蔵大臣が病死、現職の課長ら十数人が死亡し、庁舎内ではケガ人が続出したため、「タタリ」であるとの噂が広まり、塚を復元して慰霊祭が行われたのです。

その後、敗戦の年に米軍が塚の周辺に駐車場を造ろうとしますが、ブルドーザの運転手が墓のようなものの前で転落して死亡する事件が起き、塚はまたも破壊されずに残りました。というわけで、現在に至るもこの将門塚は畏敬の対象であり、新年には必ず近くの大企業の代表者たちが参拝しています。

また、将門を主祭神とする「神田明神」は、江戸時代には江戸の総鎮守とされ、徳川家の信仰も篤かったのですが、王政復古の明治となり、天皇に反逆した将門を祀ることへの強い批判が出ました。ところが明治天皇は、明治7年に参拝します。これは極めて異例のことで、天皇が東京の神社を参拝したのは、明治政府がつくった天皇教の総本山である「靖国神社」以外では、神田明神のみです。明治天皇は将門のタタリを恐れたのでしょうか。(『神田明神ホームページ』と『逆説の日本史』4・中世の鳴動編・ケガレ思想と差別の謎・井沢元彦著・小学館を参照)

このようなわけで、関東地方と天皇家とは折り合いが悪いのです。いつまでも江戸城に住まわれるのはよろしくないと思います。

脱線しましたので、話を戻します。

生きている人間を神(現人神)とし、また特定の家の子を生まれながらにして特別な人間として遇するというのは、現代のふつうの生活感覚をもつ人にとってはなんとも釈然とせず、理

クツが通らぬことですが、では、なぜ、わが日本の政府は近代になってこのような新興宗教のような思想(天皇教=靖国思想)をつくり国民を教化したのでしょうか。次にそれについて考えてみたいと思います。

(2) 「建国！？記念日」に

2013-2-11

幕末にはじめて黒船を間近に見た日本人は、西洋文明の高さに驚愕あるいは感動したと言われますが、このショックは、欧米の進んだ文明がどこからくるのかを考えさせました。

伊藤博文は憲法を研究するためにヨーロッパに行き、宗教がなければ憲法をつくっても意味がないことを知りますが、わが国にはキリスト教のような強い宗教=一神教がないので、その代わりとして、幕末に武士たちが心酔した尊王思想(日本は神国であり天皇は現人神)を用い、皇室を利用して天皇を神とする新宗教をつくることを思いつきます。

「憲法を制定するにあたっては基軸を定めなければならず、それはヨーロッパでは宗教であるが、日本では基軸となるべき宗教がない。わが国において基軸とすべきは独り皇室あるのみ。」と伊藤博文は 1888 年(明治21年)に枢密院で演説しています。翌年には、「将来、いかなる事変に遭遇するも天皇は、上元首の位を保ち、決して主権は民衆に移らない。」と府県会の議長たちに説示しました。

彼は、神の前の平等という欧米の民主主義に倣って、天皇の前の平等という日本的民主主義をつくったのですが、尊王思想をバックボーンとした「天皇教」を創作したことで、日本はアジアで唯一の資本主義国となり、天皇の恩寵(おんちよう・上からの恵み)として一定の民主化にも成功しました。



伊藤博文・
明治天皇所持の写真

このように日本の近代化は、キリスト教思想のかわりに天皇教思想を用いて遂行されました。憲法制定による人権と民主主義の政治と資本主義経済という『近代化』には強い宗教が不可欠であることを見抜いた伊藤博文の慧眼が、わが国を歴史上例をみないスピードで近代国家へと押し上げたと言えるでしょう。しかし、天皇教思想はまた、戦争や植民地政策の正当化と、わたしたち日本人に世界にも稀な「精神の負債」(哲学の貧困)をつくり出し、現在に至るも個人の生の輝きを奪う「不幸」を生み続けています。

明治前半期までは国民の過半数の支持を得ていた自由民権運動は、伊藤博文、山県有朋(やまがたありとも)、桂太郎らにより明治天皇を中核とする保守政治の敵とされ、「民権運動の息の根を止める」という根絶やし戦略により潰されました。個々人の自立、一人ひとりのかけがえのない人生という考え方は後景に追いやられ、「公＝天皇＝国家」のためを当然とする国体思想で全国民は一つにされたのです。その意味では天皇教とは竹内芳郎(よしろう)さんの言う通り、日本的集団同調主義の別名だと考えられます。



皇軍将校がオーストラリアの飛行士を切る瞬間—日本兵撮影・ライフ社所有

このような考え方は、今日の保守政治家にも引き継がれています。もし太平洋戦争による敗北がなければ、天皇教者たちによる保守政治は今日までそのまま続いていたわけですが、現代の保守主義をかかげる政治家も思想の本質は同じで【国体思想】(多様な人々の自由対話によりつくられる政治＝社会契約に基づく近代民主主義を嫌い、天皇制を中心とする日本というあるべき姿の枠内に個々人を位置付かせるという国家主義。従ってその枠外の人間は非国民となる)なのです。戦前との違いはハードかソフトかだけです。

では、明治政府作成の新興宗教と言うべき『天皇教』とはいかなるものなのか、それを「靖国神社」の理論的重鎮である小堀桂一郎さん(東京大学名誉教授)に聞いてみましょう。

「靖国神社の誕生は、官軍(天皇側の軍)の東征軍(江戸を征伐する軍)の陣中慰霊祭からはじまったのです。

慶応四年(1868年)5月、まだ京都にあった新政府の行政官である太政官府からの布告で、嘉永六年(1853年)のペリー来航以来の「殉教者」の霊を祀ることが書かれています。「殉教者」とは「皇運の挽回」のために尽力した志士たちのことで、その靈魂を「合祀」という考えです。またこの布告には、合祀されるのは、今度の兵乱のために斃れた者たちだけではなく、今後も皇室のため、すなわち国家のために身を捧げた者である、と明示されています。

靖国神社は、陣中の一時的な招魂祭にとどまることなく、王政復古、【神武創業の昔に還る】という明治維新の精神に基づいてお社(やしろ)を建立した点に特徴があります。・・靖国神社の本殿は、あくまでも当時の官軍、つまり新政府の為に命を落とした人達をおまつりするお社である、という考えで出発したのであり、それは非常に意味のあることだと思うのです。日本の国家経営の大本は、「忠義」という徳ですが、この「忠」というのは、「私」というものを「公」(天皇)のために捧げて、ついに

命までも捧げて「公」を守るという精神です。この「忠」という精神こそが日本を立派に近代国家たらしめた精神的エネルギー、その原動力にあたるだろうと思います。..その意味で靖国神社の御祭神は、国家的な立場で考えますと、やはり天皇の為に忠義を尽くして斃れた人々の霊であるということによいと思います。」

以上の小堀桂一郎さんの解説(靖国神社売店の最前列にあるパンフレット『靖国神社を考える』より)で「天皇教」とは「靖国思想」と同義であることがよく分かります。

なお、ここで、【神武創業の昔に還る】と言われている神武天皇とは、初代天皇とされる架空の人物ですが、その伝説は以下の通りです。

「日本書紀、古事記によると、初代天皇とされる神武天皇(在位:前 660 年～前 585 年)は日向(宮崎)地方から、瀬戸内海を東に進んで難波(大阪)に上陸しましたが、生駒の豪族に阻まれたため、南下して熊野に回りました。そこで出会った 3 本足の「八咫鳥」(やたがらす)というカラスに導かれて、吉野の険しい山を越えて大和に入り、周辺の勢力も従えて、大和地方を平定しました。そして、紀元前 660 年の 1 月 1 日に橿原宮で即位し、初代の天皇になりました」
[奈良県橿原(かしはら)市のホームページより]。



伝説上の初代天皇・神武—
明治天皇に似せて描かせた

神武の在位は75年間、126歳の長寿で、弥生時代前期の人ということになります。

時間・歴史をも天皇教に合致させるというのが「紀元節」ですが、明治5年(1872年)に、神武天皇が即位したとされる2月11日(太陽暦換算)を紀元節の祝日とし、西暦より660年も古いことを誇りました。世界の中心は日本の天皇である。という思想は、田辺元(天皇制は宇宙の原理と合致する)や西田幾太郎(国体は、皇室を中心にリズムカルに統一されてきた)という戦前を代表する哲学教授たちが主張し広められましたが、紀元節と共に戦後は一旦は廃止されました。しかし、1967年に多くの反対を押し切って佐藤自民党内閣は2月11日を建国記念の日として祝日とし、「紀元節」復活に道をつけました。ここには、自民党など保守派政治家の根深い「天皇教」への思いがあらわれていますが、これは「靖国神社」を敬愛することと軸を一にしているのです。



平積で売られている
パンフレット・300円

自民党は、現『日本国憲法』を廃棄して新たな憲法をつくることを「党の約束」としています。それは、彼らが天皇教を引きずる国体思想から抜けられないことをあらわしています。安倍首相は、自著『美しい国へ』で「日本の歴史は、天皇を縦糸として織られてきた長大なタペストリーで、日本の国柄をあらわす根幹が天皇制である。」と述べていますが、これは、『人間存在の対等性に基づき、互いの自由を承認し合うことでつくられるルール社会』という近代民主主義の原則とは明らかに矛盾します。

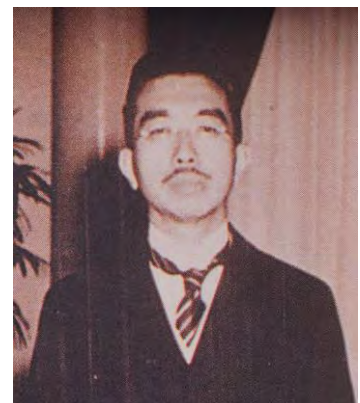
「歴史的に天皇が中心の時代があった」というのではなく、市民社会が成立した後の現代もなお「天皇制が国の根幹である」としたのでは、「おじさん、勝手に言ったらば～～」の世界でしかありませんが、どうも「哲学の貧困」のわが国では、このような国体思想が跋扈（はっこ・のさばり、はびこること）してしまうので危険です。

なお、ここで注意しなければならないのは、明治からの天皇制とは、伊藤博文が中心となってつくった近代天皇制＝天皇教のことであり、それ以前の日本の歴史・伝統とは大きく異なるということです。

明治政府は、皇室独自の儀式に拠る「皇室神道」と「神社神道」を直結させて新たな政治神道＝国家神道をつくったのですが、これは、日本古来の八百万の神＝「多神教」を、天皇を現人神とする「一神教」に変えてしまい、祭司にすぎなかった天皇が現人神（あらひとがみ）となったのですから、ビックリ仰天！というほかありません。敵・味方の区別なく祀るという神道の教義も、味方だけを祀ると変更。なんとも強引な宗教改革ですが、これを官僚政府が政治権力を用いて徹底させたのですから驚きです。いまなお、わたしたち日本人が「私」からはじまる思想を恐れ、既成の枠組みに縛られて主観性の知を育てられずに受験知や事実学だけを貯め込み、また「餅は餅屋」と小さく固まってしまう生き方になるのも頷（うなず）けます。北朝鮮の比ではありません。支配者は将軍ではなく現人神だったのですから。

誰もが知る通り、太平洋戦争での敗戦により、一旦はこの天皇教は明確に否定されました。1946年に天皇の裕仁は、「天皇を現人神とし、日本民族を他の民族に優越するものというのは誤り」とし、天皇は人間であるとするいわゆる「人間宣言」を出しましたが、こんな珍妙な宣言をせざるをえないまでにわが日本人の意識は深く犯されてきたわけです。

皇室の祭祀と政治を直結させていた天皇の祭祀大権は、『日本国憲法』の誕生により否定され、皇室祭祀は完全に天皇家の【私事】となりました。第5条—天皇は国政に関する権能を有しない。第20条—国及びその機関は、宗教教育そ



昭和天皇の裕仁・1945年敗戦時、マッカーサーと並んだ写真の一部

の他いかなる宗教活動もしてはならない。

けれども、天皇家と国家とを結びつけることで日本国は成立すると考える保守的な政治家は、「天皇の男系DNAを守れ！」との言に象徴されるように敗戦による大改革を反故(ほご)にすることに激しい情熱を燃やし、既成事実の積み重ねにより成し崩し的に天皇教を復活させようとしてきたのです。

いまに至る戦後の有力政治家の大部分は、戦前の権力者たちの子孫ですが、それにしても、敗戦による新しい日本を「戦後レジーム(体制)」と否定的に捉え、これを終わらせることを最大の使命だとする首相が現れるまでになったのですから、先祖返りもいいところです。

では、次に、天皇教は私たち日本人にどのように作用しているかを書きましょう。

国の近代化のために、キリスト教のかわりに天皇教を用いたことは、「私」を消去してしまい、底しれぬ「精神の不幸」からの脱出を困難にしている、とわたしは見ていますが、聖書に象徴される豊かな内容をもつキリスト教とは逆に、まったく内容のない宗教である天皇教(教典すらなく、型・儀式だけがある)は、日本人の無意識領域までも犯しているために、これを顕在化させるのはなかなか大変です。

(3) 個人の内面世界は、愛国思想に犯された。

2013-02-18

わたしたち人間は、自己意識の観念をもって生きる存在であり、なにかしらの基準と指針がないと日々の生活を安心して過ごすことができません。自分の生を意味づけ価値づけることに失敗すれば、精神疾患に陥ります。今までその基準と指針を与える役割を担ってきたのは主に宗教です。個別の学問や専門知は、人間の生きる意味・価値という主観性の領域とは無縁ですから、人間の生を支えることができません。科学は生の意味を示せませんが、宗教は生の意味を与えます。なお、哲学は宗教とは異なる仕方で生の意味を探求しますが、それについては第二章で主題化します。

(※現代の日本人は自覚的には宗教も哲学も持たず、世俗の価値を絶対化していますので、「世俗教」の信者だと言えます。多くは「学校序列教」=東大教徒でしょうが、世俗の価値の絶対化は、思考や判断が単眼で一面的となりますので、精神世界=内面世界は育たず、「私」固有の生の意味は消去されます。そうであれば、外なる価値基準に翻弄される脅迫神経症者として生きるほかなくなるのです。実存の悦びは元から断たれてしまいます。)

聖書にも仏典にも「正しい」生き方が示され、どう生きるかが書かれています。それを受け入れるか否かは別として、中身・内容が説得力をもって示されています。それゆえに国や時代を超えた世界性・普遍性を持ちました。ところが明治政府がつくった新宗教である「天皇教」という近代天皇制を支えたイデオロギーには、中身がないのです。7、8世紀に日本を統一した天皇支配の物語である『日本書紀』と神話『古事記』を教典の代わりにしましたが、それは、天皇に都合よく書かれた日本統一の歴史であり、生きる意味と価値をテーマとした書ではありません。

このように内容がない宗教を国教として成立したのが明治の日本国家でした。皇室崇拝をあらゆる儀式や所作をつくり全国民を教化したのです。天皇教＝靖国思想は、伊藤博文が、「皇宗の神靈に誥(つ)け白(もう)さく皇朕(すめらわ)れ天壤無窮(てんじょうむきゆう)の宏謨(こうぼ)に循(したが)ひ惟神(かむながら)の宝祚(ほうそ)を承継し」＝(終わることのない日本は永遠に天皇が治める国である)と『大日本帝国憲法』の骨子を説明したように、天皇と皇室を尊重することは日本国民の義務であり、これを受け入れれば「信教の自由」「思想の自由」を認めるとしました。馬鹿げた詐術としかいえませんが、これは案外よく考えられた支配の方法です。

人間は象徴動物なので或る「形」を要請することで、特定の想念をもつようになります。明治の開国から敗戦まで、有名な知識人の多数は天皇崇拝者になりました。ならなかったのは、弾圧の中で民権運動を担った者や社会主義者と呼ばれた民衆派ら、日々の経験につく「生きた知」の実践者のみでした。

形の要請は、現代でも服装や持ち物を規制する校則や社則に上手に用いられています。思想の外形(形式)だけをつくり、内容は明示しないという方法は、特定の想念や生き方を本人に気づかせずに刷り込むことを可能にします。官僚支配などもみなこの手法で行われてきました。形式をつくり、それに従わせることで、考え方や生き方をコントロールできるのです。



明治天皇の肖像・明治23年に全国の学校と役所に配布し拝ませた。

今の子どもたちの生活を例にとれば、固苦しい儀式としての入学式や卒業式に従わせること、部活動で毎日長時間の拘束をすること、勉強とは受験勉強であると限定すること、で「型ハマリ人」が出来、なぜ、どうして、何のため?という意味内容の追求が弱まります。自由な発想—「私」からはじまる伸びやかさや豊かさの世界が拓けなくなるのです。

明治の官僚政府は、小学一年生から毎日天皇の肖像(写真を元にしてつくった絵画)を拝ませ、日本史を天皇の歴史として教え、皇室への尊敬心を植え付ける教育を徹底させましたが、そのために、個人の内面世界は抑圧され、各自の心

は「天皇制国家を維持する愛国心」という外面思想に犯されてしまいました。「私」の心・内面世界・個人のイマジネーションの広がりや構想力は、邪魔(じゃま)とされたのです。今日に至るも、実存的な思想や全体の意味を構想する能力は求められず、「餅は餅屋」として種々の技術を磨くことや専門知だけが必要とされ、生き字引のような暗記頭が高評価されています。意味論としての知や自分の頭で考えるというほんらいの哲学の営みは日本にはほとんどありません。大学哲学は専門知になっていますので、「哲学者とは哲学することで馬鹿になった人種のことだ。」という嘲(あざけり)がその通りとなっています。

「現実」とは、人間にとっての現実である限り、文学や演劇や音楽などの非現実を含んではじめて現実なのですが、政治的、経済的な外的現実ばかりが肥大化した国に生きると、生きる意味である「私」の内的世界は育たず、ロマンや理念の世界が消えてしまいます。即物的な価値観に支配された灰色の不幸に陥ります。情緒音痴で表情に乏しい人、紋切型で人間味の薄い人で溢れます。全てが数値化され序列化された国では、「私」固有の生の意味が失われてしまうからです。他者との競争と損得勘定が生き方の中心となれば、対話や議論も勝つか負けるかの「ディベート」にまで貶められ、なにがほんとうかを目がける「恋知(ほんらいの哲学)問答」の営みは育ちません。「日本人ほど政治的な国民はいない」と言われるのは、ありのままの心を見、私の考えを育て・語ることが少なく、たえず上下意識を持ち、他者からの承認に怯えて効果ばかりを考える言動に終始しているからです。「私」から立ち昇る実存的魅力に乏しい生は不幸です。

外なる価値を追い求め、世間体を気にし、序列意識に支配されているは、中身・内容に乏しい「真実のない人生」しか得られないはずで、それでは人生の失敗というほかありません。

(4) 形と序列、二つの言葉に収まる。

2013-02-25

ここで誤解を招かないように一つ確認します。

わたしは、いまの天皇である明仁さん、美智子さん、皇太子の浩宮さん、雅子さんに対しては、好感をもっています。悪感情はありません。

わたしが批判しているのは、個人としての天皇や皇太子のことではなく、天皇・皇室という制度が醸し出す空気(宮内庁の役人が演出)であり、私たちが知らずに刷り込まれるある種の観念のことです。

では、その観念＝「形式主義と序列主義による人間を幸福にしない思想」とはどのようなものかを見て行きます。

わたしたちの生活を振り返ると、学校でも、会社でも、役所でも、趣味の会でも、社会活動団体でも、みな「形」が優先し、上か下かの「序列」意識に縛られていることに気づきます。

日常の言葉がまず、序列です。相手を呼ぶ時の言葉は二人称ですが、日本語に英語のyouがあるかと言えば疑問です。youは「あなた」と訳されますが、「あなた」を会社で上司に使えるでしょうか。社員が社長に「あなたのご意見をお聞きしたいと思います。」とは言えません。日本語にはyouのように誰にでも使える二人称はなく、いつも相手と自分のどちらが上かを考えて呼びかけの言葉を選ぶ必要があります。言説の中身・内容以上に、呼び名が適切か否かに神経を使わないといけなのです。日本の人間関係が「あいさつことば」(形)とその延長に過ぎず、各自の「私」の思うこと・考えること(内容)のやりとりに発展しないのは、言葉のありようとその用い方にも原因がありそうです。

このように、序列意識は、必然的に形式が内容に優先する文化を生みます。「私」からはじまる内発的な生ではなく、あらかじめ決められている外なる価値に合わせる生き方になりがちです。

わたしは、小学5年生の時に読んだ『社会のしくみ』という本に載っていた詩の一節「ぼくの人生は、ぼくのものだ。」に深く感動しましたが、それは、上から被(かぶ)せられた覆いや重しを吹き飛ばし、「私」からの生を高らかに宣言する光輝だと感じたからでした。以後、わたしは、外なる価値に従うのではなく、自分自身の「納得」につく人生を歩み、今年で半世紀が経ちます。形ではなく【納得を原理】とする生は、中身の濃い人間性豊かな社会をうみますが、それとは対極にある形式優先の社会は、自然な人間性を肯定せず、生のよろこびを奪うのです。

人間存在の対等性を原理とする近代民主主義社会に生きていながらも、皇室に生まれた人間に対して特別の敬語を用いることを怪しまない空気に支配されるのは、日常の生活が民主的倫理に基づいていない証拠です。天皇を「明仁さん」と呼ぶ人はまずいません。「さん付け」は民主制を支える倫理の基本なのですが、基本すら踏まえない人が多数派です。「くん」か「さん」か「せんせい」付で区別し(「差別」ですが)、一番上にすべてを超越する呼び名として「天皇陛下」を置くというわけです。中身・内容以前に、形・立場があるわけですが、形を優先させる日々の行為は、序列化の思想を正当だと思い込ませ、それに従わせます。

「日本人はレジャーでさえ、どこに行き、何をすることが決められている」とはウォルフレンの言葉(『日本権力構造の謎』)ですが、形と序列で生きていたのでは、何をしてもすべて紋切型にしかありません。納得を原理とする「私」からの出発＝私を活かす人生を創造することは不可能です。それにしても人間性の赤裸々な表現である「遊び」をも管理され序列化されて「型ハマリ」では、もう泣くに泣けないですね。

趣味の活動も愉悦にならず、競争や上下意識がつきまとい、強迫神経症者のごとくですし、所有物もクルマからバッグまで序列的価値観が支配します。内容を吟味し、自分の目的と心身にフィットするものを愛用するのではなく、他者との張り合いや他者からの承認に怯えて名前と外見に拘ります。有名な物品をもつこと、有名な観光地に行くこと、有名なお店で食事をする……が、まるで人生の主要な価値のようにテレビは伝えます。なんとも愚かです。



100パーセント内側からの笑顔の子どもと私—奥多摩での遊び
ソクラテス教室『大学生クラス』の
西山裕天(ひろたか)さん撮影

大学も名前で序列化されています。見事なまでに上下です。校舎や設備、入試方法や授業内容まで全て画一化されていますので、単純な序列に収まってしまいます。多様性・色どり豊かな世界とは無縁で無機質ですので、学ぶ学生によるこびはありません。大学卒の資格＝形を得るために通うのです。

東大、とくに法学部に在籍すれば、外なる価値はしっかり保証されます。暗記脳でパターン知の持ち主でしかなくても、よい地位が得られます。内容は二の次、東大ブランドは絶対です。日本人の「東大病」＝「東大教」はもうみなさまご存じの通り。

勉学の目的は上位の学校に入ることに過ぎず、ほとんど意味のない丸暗記のペーパーテストで青春が終わります。どうしてもよい資格試験と呆れるほどバカバカしい各種検定試験で溢れていますが、誰も疑いを持ちません。なぜ? どうして? 何のため? という意味論・本質論の探究は消えてしまい、ただの「事実学」を貯め込む勉学でいたずらに人生が浪費されます。著名な人類学者・モンターギューもいう通り、「学士、修士、博士と進むにしたがい、知的にも精神的にも萎えて」いきます(『ネオテニー』)。自ら生み出す「能動的な知」の力は消え、受動的に書物を切り貼りするだけの「見かけ倒しの知」に陥ります。同じことは、2400年前にソクラテスが指摘しましたが、それが哲学(正しい訳語は「恋知」)の起こりです。とても大切な話なので、以下に記します。

ソクラテスは70歳の時「ギリシャの神々を信ぜず、青年たちを腐敗・墮落させている」として訴えられ、500名の陪審員裁判で僅差ですが有罪となり、死刑となりましたが、告訴された深因は、恐らく、以下のようなソクラテスの見解(法廷における証言)にあると思われます。



アテネ大学前のソクラテス像(『ソクラテス教室』生徒(当時)の中野牧人さん撮影)

「アテナイ人諸君、諸君にはほんとうのことを言わなければならないのですから、誓って言いますが、わたしとしては、こういう経験をしたのです(その直前で智恵があると思われている政界人と対話したことが述べられている)。つまり、名前の一番よく聞こえている人が、神命によって調べてみると、思慮の点では、まあ九分九厘までは、かえって最も多く欠けていると、わたしには思えたのです。それに反して、つまらない身分の人が、その点むしろ立派に思えたのです。」(『ソクラテスの弁明』(7)ープラトン全集1)

ソクラテスの政治家への見方は、知識人一般への評価と同じでしたが、彼らのもつ知とは異なる「ほんらいの知」は、話し言葉に基づく生きた知＝対話的理性であること

が、『パイドロス』において強い調子で述べられています(岩波文庫版では、P.134～146)。それが *philosophos* = ギリシャ語「智恵を恋する人」の定義とされますが、次のようです。

「書かれた言葉(文字)は想起の役目をするに過ぎず、いま、実際に語る言葉によって生きる者、真善美に憧れつつ学び、真に魂の中に刻まれる言葉のみが価値だと考え、それを話し言葉で証明するだけの力をもつ者、それを恋知者(哲学者)とか、これに類した名で呼ぼう」(要旨)。

なお、『弁明』で、思慮の点で立派だといわれている「つまらない身分の人」とは、石工などのように手や身体も使って仕事をする人ですが、現代でいえば、エリートや専門的知識人ではなく、ふつうの生活者と考えればよいでしょう。

では、話を戻します。

明治政府がつくった天皇教＝靖国思想が生んだ日本人の生き方は、形と序列の二文字で象徴的にあらわされますが、これでは、一人ひとりに幸福が来ることはないでしょう。序列意識に支配された「型ハマリ」の人生では、どう転んでも不幸です。お金や地位があってもなくても同じです。それらがあれば楽ではありますが、ただ楽であるだけです。

先に触れましたように、明治政府は、皇室祭祀を最高位に置き、これと神社神道を直結させて「国家神道」という新宗教(天皇教)をつくりましたが、それに伴い明治4年(1871年)に全国の神社の等級を定め、その後の地方制度の改変により『大日本帝国憲法』発布までに次のように確定しました。官幣社(大、中、小)、国幣社(大、中、小)、府県社、郷社、村社、無格社の6段階で、国民が新たな神社をつくることを禁じました。現人神(あらひとがみ)である天皇が大神主も務める国家神道は、この序列化によって完成しましたが、仰々しい祭祀が中心、形ばかりで中身の無い宗教は、わたしたち日本人の意識をヒドク歪めてしまいました。中身・内容以前に形がある、「正しさ」はあらかじめ決まっているという逆立ちした観念を植え付けたわけです。

それは、天皇の官吏=官僚による日本支配を正当化する想念ともなり、東大法学部卒の官僚であるという形による支配・正しさの独占・上からの絶対的規範は、今日もお根強く残り、わたしたち日本人の知や学問のありようを規定しています(これについては、参議院調査室から依頼された論文『キャリアシステムを支える歪んだ想念』に書きました)。学校(小学校—大学)における固く融通の効かない知の教育は、呆れ返るほどですが、日々の具体的な経験につく自然な知(それがほんらいの知性)とは異なる型ハマリの学習・解法のパターン化は、今日さらにヒドクなっています。



昭和天皇死去の3時間半後に行われた剣璽等継承(けんじとうけいしょう)の儀。——草薙(くさなぎ)の剣と八坂の勾玉(まがたま)と、天皇の印と国の印を受け継ぐ儀式

さらに、わたしたちが生きる上で一番切実な男女関係、結婚、家庭のありようについても明治政府は、帝国憲法発布と前後して、古くからの日本の伝統であった自由恋愛を禁止し、強力に「見合い結婚」を勧めます。天皇教の下で富国強兵を進めるために男女の自然な結びつきを嫌ったのです。それが家父長的家庭観とセットになり、女性差別を当然のこととしました。



明治政府は、「富国強兵」のために、儒教の上下倫理を徹底させ、「恋愛」を邪(よこしま)なものとして、「見合い結婚」を強力に推進。

以上、見てきましたように、人間のほんらい性・自然性から逸脱した人為的な政治と思想を象徴するのが天皇教=靖国思想です。一人ひとりの「私」から発する豊かさとは無縁の「型ハマリ」の観念に基づく人生に誘導する空気は、このようにして生みだされました。天皇や皇室という制度が醸

し出す空気は、生き生きとした「私」の意識を鈍麻させ、知らずに惰性態へと導きます。様式によって意識を支配します。のびのびした自由な心が失われ、身体がこわばるのです。感情の発露が抑えられ、顔の表情が貧しくなります。

日本の入学式や卒業式が子どものもつ可能性—未来を感じさせる楽しいものではなく、重く堅苦しい儀式なのは、天皇制国家の象徴のようです。本来こどもたちのための式なのに、主役は「日の丸」であるかのような壇上、明治天皇に捧げられた皇室の歌＝「君が代」斉唱の徹底に狂気のごとくに取り組む役人や政治家の姿を見ると、なんとも呆れるほどの国家宗教の国だな、と思います。わたしは哲学徒で仏教徒（浄土真宗大谷派）なので、長年とても違和を感じてきました。日本の人間開眼、白樺派が先駆の〈人間性の肯定—ルネサンス〉が必要です（わたしが全コンセプトを創った『白樺文学館』創成記をご参照下さい）。醸される「空気」によって、生命の力と輝き・心身の澁刺さ・囚われのない自由な心が抑圧されたままに生きるのでは、根源的不幸としかいえません。



白樺文学館・2001年武田撮影

(5) 一章おわり—まとめ

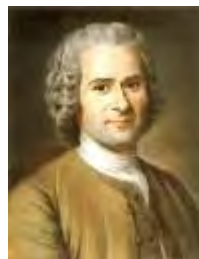
2013-03-06

天皇制という思想は、

- (1) 皇室祭祀という荘重でかつ仰々しい儀式がつくる「空気」により、形式≒様式を優先させる考え方を正当化し、
- (2) ふつうの人々を「超越」する存在として天皇と呼ぶ男性を置き、その一族を皇族として他の家族とは異なる高貴なものとする、

というわけですが、

言うまでもなく、こういう想念・思想を「人間存在の対等性と思想及び良心の自由」を前提とする近代民主主義社会において維持するのは、ほんらい不可能なはずです。遡(さかのぼ)れば、王権否定の徹底した平等



ルソー 人民主権
の近代民主主義
を確立。
「社会契約論」

思想である釈迦の思想とも相いれません。

現天皇制の問題性は、宮内庁官僚の思想と行動の度し難いアナクロニズムにあらわれていますが、それをよく知るには、33年間も宮内庁記者を勤め、皇族と親しくお付き合いしてきた板垣恭介さんの著書—『明仁さん、美智子さん、皇族やめませんか』(2006年・大月書店刊)をご覧ください。



ガンダーラより発掘された釈迦像。徹底した平等思想・慈悲と智恵の宗教

きちんと考えれば分かりますが、天皇制思想を取るなら、人民主権の近代民主制思想の原理を否定しなければならなくなるのです。

中身・内容がつくる世界ではなく、あらかじめ決められている「形式」に従い、その形式が要請する「序列」を受け入れるというわれわれ日本人の生き方は、天皇や皇室という存在を意識すると否とに関わらず【天皇制的】であると言えます。「日本人が三人集まれば、もう天皇制が始まる」と揶揄される意味は、三人の序列が、その時々々の言動内容により変動せずに固定化されてしまうこと、しかも「序列」は、出自や学歴や職業などの「形」によるものだからです。これでは、一人ひとりの精神の内部から湧出するよろこびとは無縁の形式的な生き方に陥るほかなく、実存の豊かさ・魅力は育ちません。【知識・履歴・財産の所有の程度】を競う哀れな外面人間＝ただの「事実人」(人間としての意味と価値をもった存在ではなく、事実としては人であるにすぎない)として生きるほかなくなるのです。

一例として、こどもの心を無視した固苦しい「型ハマリ」の入学・卒業式を挙げましたが、この形式主義と序列主義は、わたしたちの生活のさまざまな場面を犯しています。お祝い、お礼、依頼、お詫び、お見舞い、招待、弔辞・・・の言葉もみな形があり、文書にする場合は「文例」があってそこから選ぶのです。「私」の気持ちと考えの内容から立ち昇る言葉ではなく、あらかじめ決まっている形をチョイスするだけですが、誰もそれを怪しまないのですから、怖くなるほどの呪縛力です。

わたしは、善美に憧れるよろこびの多い人生を歩むには、このような精神風土と縁を切る必要があると考えてきました。他者の思惑に左右されて生きるのではなく、主体性をもって「日々を創造」しつつ、形と序列が支配するわが国の精神風土を変えていく人生を歩んできました。それを支え・可能にしているのは、「恋知」(ほんらいの哲学)という考え方なのですが、それについては、第2章以降の【恋知の生】に書きます。

2013. 3. 11. 武田康弘

『恋知』—「私」の生を輝かす営み

第2章 ^{れんち}恋知とは何か

(1) 概括

2013-6-1

わたしは、人間のよい生・優れた生・魅力ある生を、恋知の生と呼びます。

恋知という言葉は、古代ギリシャのソクラテスが命名した **philosophia** (ギリシャ語) の直訳です。善美に憧れる恋心がつくる人間に固有のエロースの生を称揚する言葉です。プラトンによるソクラテスの対話編『パイドロス』及び『饗宴』をお読み下されば、「恋」がキーワードであることがよく分かります。

西周 (にしあまね・1829～97) により明治時代につくられた「哲学」という訳語は、近代西洋の **Philosophie** (ドイツ語・フランス語)・**Philosophy** (英語) の邦訳ですが、これも直訳すれば同じく「恋知」となります。

わたしは、以前より哲学を恋知と訳すべきと主張しています (書物としては、^{キム・テ}金泰昌と武田康弘の哲学往復書簡 30 回 = 『ともに公共哲学する』《東京大学出版会刊》の 84 ページに書きました) が、そのわけは後に詳しく述べます。

恋知の生とは、自らの「考える頭」をよく用い、意味を了解し、心身によるこびが広がる生き方のことですが、それは、名や序列を重んじて形式を優先させる従来の日本人の生き方とは異なりますし、強い一神教に従う生とも違います。世俗の価値に沿う集団主義でもなければ、超越者への信仰でもない第三の道と言えませんが、その恋知を象徴する一人物が数年前に映画になりましたので、ご紹介します。



その名は、ヨーロッパ映画史最大の製作費を投じてつくられた『アレクサンドリア』(スペイン映画・2009 年公開・DVD は 2011 年) の主人公ヒュパティアですが、優れた天文学者・数学者で、新プラトン派の恋知者でもあった彼女は、キリスト教の司祭に「あなたは何も信じていない」と詰問された時、静かに揺るぎなく「わたしは恋知 (哲学) を信じています」と応えます。

身分の違いなく教え、みなに慕われた優しい教師でも

あったヒュパティアは、紀元後 415 年にキリスト教徒たちによって惨殺されましたが、古代アテネの民衆によって有罪とされ死刑となったソクラテスと共に、真実を求めて愛と理性に基づいて生きる恋知者の受難でした。

古代ギリシャの天文学者アリストアルコス(紀元前 310 年～239 年)は、彼の直前で活躍したアリストテレスの学問的権威に影響されずに、アリストテレスの「天動説」(紀元後2世紀になってプトレマイオスが主著『アルゲマイスト』に記した天動説はアリストテレスに依拠したもの)を退け、「地動説」を主張します。その論拠は明快で驚くほど適確でした。学問の祖と言われる博物学者のアリストテレスには間違いが多く、現代のことばで言えば「科学的」ではありませんが、アリストアルコスは合理的でした。しかし、彼の地動説は、当時から自分を中心だ(地球は宇宙の中心のはず)と想っていたがる人々の反発を買い、紀元後には、アリストテレスに依拠したプトレマイオスの天動説がキリスト教に合致するために支配的となったのです。

明晰な理性と深い思考力をもつ天文学者・数学者にして恋知者であったヒュパティアは、ギリシャ文化を受け継ぐ古代最大の学問の都であったアレクサンドリアの図書館で、観測と実験と思考により「地動説」の正しさを確信していきますが、映画『アレクサンドリア』は、そこに焦点を当て、人間の宇宙認識の広がり・理知的思索的な能力への信頼・真実に憧れる透明な心・公正で豊かな愛情を美しい映像で表現しています。

この映画には描かれていませんが、ヒュパティアは学生たちに次のように述べています。

「あなたが考えることで得られる『正しさ』を大切にしないで、考えて間違えたとしても、考えないことより遥かによいのですから。」

「形式を整えた宗教は、すべて人を惑わせます。最終的に自己を尊重する人は、けっして受け入れてはなりません。」

「神話、迷信、奇跡は、空想や詩として教えるべきです。それらを真実として教えるのは、とても恐ろしいことです。子どもは、いったん受け入れてしまうと、そこから抜け出すことは容易ではないのです。そして、人は信じ込まされたもののために戦うのです。」(英文からの翻訳は武田)

ここには、みなが言うからという「一般的」なよいや正しさではなく、また、一神教が示す「絶対的」なよいや正しさでもない第三の道＝「普遍的」なよいや正しさを求めるヒュパティアの精神が、明瞭な言葉となってあらわれています。

現代の欧米人でも多くは、「絶対的」と「普遍的」を似たようなものとして並列に語りますが、絶対と普遍が一体化してしまうと、「一般的＝世俗的」と「絶対的＝宗教的」の二項対立となります。この不毛性を超越するのが第三の道＝恋知です。そこでは、ヒュパティアの言葉に象徴される「普遍性」の追求がありますが、それは特別なことではなく、無自覚ではあれ、子どもやふつうの生活者がしていることです。

なにが、どれが、「ほんとう」なのかな？「よい」のかな？「美しい」のかな？を問う心は、子どもほど強く、子どもは、損得勘定や利害得失よりもこの「真善美」に惹かれます。みなが言うから、あるいは、権威者(親や教師)が言うからではなく、うん、なるほど、とほんとうに納得できる答えを見つけたいのです。真善美の探求＝普遍性を求める心とは、人間の最も人間的な世界です。わたしの経験では、愛され肯定されて育った人ほど素直に真善美＝普遍性に向かう心が強く、自分の頭で考えようとします。情報の流れや既存の考えにストップをかけ、心身の声をよく聴こうとします。この柔らかな精神は、ネオテニー(幼時の姿や特徴を残したまま大人になる)という人間の生物としての特性で、型ハマリにならず、いつまでも変化を続けます。人間がよく生きるにはこの特性を失わないことが必要ですが、それはどのようなものなのでしょう？人類学者のモンターギュが書いた『ネオテニー』からこどもの優れた特性として説明されるものを抜き出してみましよう。

自ら笑う、よろこぶ心、遊び心、好奇心、驚く心、意味づけ体系づける欲求、ユーモアのセンス、愛の欲求と愛する能力、機知、想像力、創造性、楽天主義、率直、公正、正直さ、同情的知性、歌い、踊る、自由、開かれた心、寛容さ、柔軟性、しなやかさ、適応性、学ぶ欲求、実験精神、探究心、弾力性、跳ね返す力、考える衝動と考え好き、偏見のなさ、感受性……



☆ 写真のように、チンパンジーは、こどもから成体へと変化するが、人間は、幼児の姿と特性を保ったまま成熟する。人間は、幼いチンパンジーに似ている。

ほんらいは、これらの能力を維持し伸ばし続ける人こそ、真に優れた人となるのですが、現実はそのではなく、逆に、上記のこどもの優れた特性を活かして生きる人を「奇人」と呼び「非同調者」と呼び、変り者として排除します。既成秩序を超える優れた者に支配者(その社会でのエリート族)とその同調者たちは、苛立ちを覚

え、怖れ、嫌い、人々を煽って彼らを抑圧するのです。戦前の日本では、天皇教＝靖国思想の下で教育思想と制度を管理し、非同調者を「アカ」と呼んで拷問・殺害しましたし、欧米ではそのような女性を「魔女」と呼んで殺しました。

今日でも「ダメにされたこども」である大人は、「厳禁の精神」で人間を縛り、生きる喜びを奪います。21世紀のルネサンス-ソクラテスとヒュパテイアの復活が必要です。

話を戻します。

一人ひとりの個人は、集団同調して「一般化」の海に沈んでしまえば「私」は消えてしまいますし、権威者を求め「絶対化」に向かうと、心は固くこわばって人間の豊かさ・悦びとは無縁となりますが、対極に見えるこの「絶対化」と「一般化」は、ともに自分の頭で考えない習慣が生み出す【惰性化】で、表裏一体のものと言えます。絶対化とは、より強固となり偏執した一般化！

【普遍化】とは、なぜ？ どうして？ なんのため？ と意味を問う「私」の営みが生み出すもので、疑い・考え・試し・確かめ、それを他者に示す作業によりだんだんと豊かになっていくものです。自問自答と他者との対話を繰り返し、自他ともに深く納得できる考えに鍛えていくわけですが、最終的な答えを得る場所は、私の「腑に落ちたという覚え」以外にはありえません。その意味で、普遍化とは、説得力と魅力を増していく「私」と結び付いているのです。

善美に憧れ、普遍性を求める【恋知】とは、なによりも「私」の生を輝かす営み。

(2)「ネオテニー」という特性と「恋知」の営み

2013-06-19

「ヒトは、その身体、精神、感情、行動のいずれにおいても、幼児的特徴を減少させるどころか、逆に、強調するような方向で成長し発育する動物なのだということこそ、真実なのである。けっして私たちの大多数がそうなってしまったような大人に育つべく、つくられてはいない。」

これは、ネオテニー（幼態成熟）と呼ばれる人間の生物としての特性を人類学者の A.モンターギュが説明した文章の一部ですが、彼の著書『ネオテニー』には、以下のような言葉があります。

「健康とは、愛し、働き、遊び、しっかりとものを考える能力のことである。」

「良いことも度を過ぎれば良くないように、賢者ですら賢さが過ぎれば愚者となる。」

「神が愛するのは、若々しく年をとる(grow young)人間だ。神は、若々しく年をとる者は、彼らが困難があるがままに受けとめてきたゆえに愛するのだ、と、かの素晴らしき哲学者オスカー・ワイルドは完璧に理解した。年齢的に若いときの若さは、天から与えられたもの。若いままで老齢に達するのは、自ら到達しえたもので、それは芸術的仕事なのだ。」



ネオテニーという特徴をもつわたしたち人間は、ほんらいは、形式的、様式的、儀式的、紋切型、型ハマリ、固く融通がきかない、厳禁の精神・・・とは無縁の存在です。しかし、支配・被支配の抑圧的人間関係をもつ社会では、家父長的・男権的な思想が、老若男女みなを精神を悪しき「大人」へと墮落させてしまいます。とりわけわが国の場合は、封建社会から近代社会への移行を「民主的倫理」によるのではなく、天皇教に象徴される「上下倫理」に基づいて強要した結果、人間のもつネオテニー的特徴は著しく抑え込まれてしまったわけです。「〇〇らしく」という発想を持ち、それを強要する抑え込み文化は、自然な人間性を肯定せず、型ハマリ人を生んできました。

明治時代に主権者である天皇とその保守政治を支えた東大法学部卒の官僚たちの言動は悪しき大人の代表と言えるでしょうが、現在も「役人」という言葉から連想するのは、豊かな人間性とは対極の型ハマリ人です。この公式人間はみな嫌われますが、近代化の中で果たすべく【裸の個人としての魅力を育てる】というもっとも大切な課題を果たさなかったわが国では、官僚に限らず多くの人が、未だに自分が感じ・思い・考えた「内容のある話をふつうに交わす」という人間として生きる基本を身に付けていないようです。

取り留めのない「おしゃべり」は呆れるほどありますし、教師や官僚らと同様の「公式的で型通りの言辞」はありますが、「中身・内容のある話」はほとんどないのです。むしろ内容の豊かな話しは敬遠されるのですから呆れます。自由討論までも権威的指導者に誘導され、ハーバード大学の権威に従うNHKのディベート・ショーを有難がるというありさまです。ほとんどの大学教師も、恋知(哲学)はソクラテスによるディベートの否定に始まるという事実さえ知りません。ギリシャ語の *philosophia* (恋知)とは、ソクラテスが発案・命名したもので、言論の勝負(ディベ

ート)を否定し、善美に憧れ「ほんとう」とは何か？を求めての自問自答と問答的対話を呼ぶ言葉なのですが。

学校における学習内容も、公式当て嵌めと丸暗記が主で、型を仕込まれた生徒が優秀と評価されますから、意味論・本質論としての知・学が育ちません。学習は技術的な知ばかりですので、この世は進学塾で「パターン」を仕込まれた紋切人で溢れます。最近では、進学に必要な科目の点数アップに留まらず、創造的と見られるにはどうしたらよいか？とか、囚われのない思考と評価されるにはどうするか？とか、個性があると思われるためにはどうふるまうか？とか、はたまた、最先端の哲学思想の身に付け方！？ブラックジョークのようなハウツーのオンパレードですから、絶句。大学の思想関係の学部でも、誰の説がよいかと受験参考書と同様の表にして比較し、商品を買うようにいま流行りの思想家をチョイスするというありさまです。そのための情報提供を上手に行うのが優れた大学教授と見なされています。

何事も権威者・専門家やマスコミのいう通りで、「ぼくの人生はぼくのもの」という生の基本がありませんが、これは日本だけの話ではなく現代社会に共通する問題であることは、1991年にアメリカ・ニューヨーク州の最優秀教師に選ばれたジョン・テイラー・ガットの著した『バカをつくる学校』を見るとよく分かります。この本には、アメリカの学校が画一的人間と紋切型の知を生む温床になっている実態が描かれています。そこから、著者のガットの分析と提案がなされていますので、以下にご紹介します。

『集団教育はいかにもアメリカ人らしい生徒を生み出した。つまり、知性を信じず、迷信深く、自信に欠け、どの国の子どもたちよりも「内面の自由」に乏しい生徒である。こうした子どもたちは、貧弱な「集団的性格」をもち、美德や美学といったものを軽蔑し、人生の危機に対して無力な大人になった』とラッセルは言う。



そろそろ私たちは何か別のことを試してみるべきではないだろうか。「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるが、他者と共存することを学ぶには、まず個人として、家族として、自立して生きることを学ぶべきだ。なぜなら、私たちは自分として満足できて初めて、他人にも満足できるからである。

ところが、私たちは機械的な手段でアメリカ社会の統一の問題を解決しようとしたのである。その結果、アメリカをアメリカたらしめている民主主義の理念が裏切られることになった。

家庭や地域社会が再生されれば、子どもはかつてそうだったように、自分の力で学ぶようになる。今の彼らには、金銭以外には努力する目的がないが、金は決してよく生きる動機にはならない。こんな学校は早く破壊し、教員免許も取り払って、教える意欲のある人なら誰でも教師になれる、そんな自由で民主的な教育を始めようではないか。

私たちは、小さな植木鉢に入れられた植物のようで、依存に慣れてしまったために、危機にあっても教師の指示を待つだけになっている。私たちに必要なのは、国の解決策ではなく、豊かな実験室としての地域社会に目を向けることである。そして、みずからの内面を見つめ、「己を知る」ことである。

会衆派(自分たちで考え・話し・決定した植民地時代のニューイングランドの優れた人々の)社会の原理にこそ答えがある。当時の社会では、人々が積極的に実験し、みずから責任を負っていた。子どもや家庭にとって何が最善かを知るためには、まず彼らを信頼することだ。子どもと老人の垣根を取り払い、企業も高齢者も、地域社会のすべての人を教育に参加させることだ。そして解決策を地域に求め、一人ひとりの判断を尊重することだ。教育の結果を恐れる必要はない。読み書き・計算を教えるのは難しいことではない。学校の脅しに屈して、子どもたちを専門家に引き渡してはならない。教員免許という制度は早く撤廃すべきだ。」

(『バカをつくる学校』成甲書房・2006年刊)

著者のガットは、30年間にわたり公立学校の教師で、マンハッタンの裕福な子が通う学校と貧しいハーレムの子が通う学校の双方で教えてきました。ニューヨーク市とニューヨーク州から最優秀教師として表彰されましたが、政府や州によって何度も行われてきた「教育改革」とは、親心を利用したペテンにほかならないことを身を持って知り、1992年にこの本を書いたのです。この書は全米で大きな反響を呼び、彼は各地で盛んに講演活動を続けています。「私は自分の専門知識を子どもに押し付けるのをやめた。その代わりに、彼ら本来の才能を邪魔しているものを取り除こうとした。政府に支配された学校は、私のような教員が増えると、学校制度全体が危機にさらされるとして警戒し、抹殺しようとする。・・・**自学**こそが、「コンバイン」(人間を刈り取り・選別することを当然と思わせるマインドコントロールシステム)の非人間的で愚かな体制から逃れる唯一の方法である。私たちは**地域**の中にならず

かに残されている自由領域を広げ、子どものころの希望や活気、想像力を取り戻そうではないか。」と ---

アメリカでは、自分の頭で考えない機械的な教育を変えるために、哲学者のマシュー・リップマンによる小学一年生からの「哲学問答教室」も 1970 年代から始められ、全米の数千校で実施されてきました。その模様はイギリス BBC が取材し、日本では 1990 年に NHK が「6 歳からのソクラテス教室」として放映しました。また、フランスで始められた幼稚園の哲学教室の様子は、日本でも販売されている DVD『ちいさな哲学者たち』（ファントムフィルム・2012 年）で見ることができます（なお、冗談のようですが、これは文部科学省の青年・成人向け選定かつ厚生労働省社会保障審議会の児童福祉文化財選定です）。北欧でもオランダでもドイツでも、先進工業国はどこも近代社会の負の遺産を清算しようと、自分の体験を基にして自分で考え・対話する能力の重要性を認識し、教育＝知のありようの抜本的改革に取り組み始めていますし、国連のユネスコも各国に「哲学する教育」（哲学書教育ではない）の普及を呼びかけています。

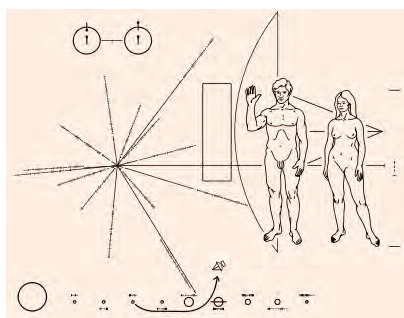


しかしわが国では、壇上にバカでかい日ノ丸を掲げさせて拝ませ、「君が代」を口を開けてしっかり歌わせるという教育改革！？？です。愚か過ぎる話で、知的退廃と評するのもためられるほどですが、まさに「バカをつくる学校」（笑・呆）です。学校も進学塾もパターンを身に付けさせる紋切知の訓練のオンパレード。勉強するほど表層知を貯め込むただの「事実人」になりますが、それは現代の官僚や大学教師の理性の低さによく現れています（全員とは言いませんが）。彼らは、事実学だけを貯め込んだ情報マシーンに過ぎず、自分の頭を使って考えるとはどういうことかを知りません。わたしの数々の体験から断言できますが、受験塾でパターン知を仕込まれていない小中学生のやわらかで自由な思考力に彼らの頭脳は到底及びません。

わたしは、現代文明がここまで歪んでしまった深因は、人間の生物としての特性であるネオテニーを抑え込んだ結果だと見ています。上下倫理が象徴する人間を差別する権力主義と既得権益を守ろうとする意識が生む社会システムは、固定した形式に生を閉じ込め、決められた型通りの「大人」になることが当然という意識をつくります。ネオテニーとしての豊かなよろこび・とらわれのない自由・澁刺とした命の輝きを奪い、人間を既存の道徳とシステムに従うのみの奇形者に貶めるのです。

ここまでお話すればお分かりと思いますが、わたしの提唱する「恋知」という営みは、このネオテニーという特性を活かすことで成立します。逆から言えば、人間はネオテニーという特性を持つので、よい・優れた・魅力ある生は、恋知の営みにより可能になるといえるわけです。わたしは、この原理の自覚こそが、「国家と文明」成立後の人間性の抑圧と歪みから人間を救うことになる、と考えています。

わたしたちの直接の祖先である現生人類＝ホモ・サピエンスという種は、20万年ほど前にアフリカで旧人から進化したのですが、5万年ほど前から急速に世界各地に広がり、日本列島には4万年ほど前から住みつきました。世界的に四大文明と呼ばれる「国家と文明」が成立した以降の歴史は数千年ですので、時間的には最後の10分の1ほどです。この短い期間に、人類は優れた文化を生み発展させてきましたが、同時に強大な権力による一人ひとりの生の抑圧という負の結果も伴いました。



人間愛に満ちた天文学者・カール・セーガンと妻の制作でパイオニア10号11号に積まれた図—太陽系外への飛行を続けるため、万—知的生命体に回収されることを想定してのロマン

現代においては、過去とは比較にならぬほど緻密で巧妙な「管理社会」となっていますので、自主性・能動性・主体性は消え、勉学は教師の指示通り、心身体問題は医師に盲従、はては、離島に行き自然の海で泳ぐにも「ライフ・ガード」と呼ばれる学生の指示に従わされる(笑・呆)という情けないありさまです。けれども、現代人は皆それを疑わず、当然と思うまでに

心身を奥深くまで侵されています。人々の自由を奪う騙(だま)しの論理の前に、思索力を奪われた頭脳は「青菜に塩」の状態です。御用思想家・評論家たちは、この「人間を幸福にしない」思想と制度をソフィスティケートされた言説を用いて煙に巻く役割を果たしますが、彼らもまた既成秩序の奴隷です。われわれは人間管理の思想により、人生の「根源的選択」(サルトルの言葉)領域における自由を奪われ、代わりに「表層的選択」の自由のみを豊富に与えられますが、それが「存在の耐えられない軽さ」を招来しています。物や機械やシステムではなく、人間を管理できると思うまでに精神は病んでいるわけですが、原理上、人間存在とは客体化できえぬものであることさえ知らないようではどうしようもありません。存在論のイロハさえ踏まえないので、平気で「管理職」なる言葉が使われるのです。

ネオテニーの特性を活かした恋知の生とは、そのような事態と決別し、イキイキ・のびのび・ワクワク、中身いっぱいの澆刺とした日々をつくることを可能とする生き方です。型通りの「大人」になり、ノッペラボウで「形式は立派だが中身は浅く

軽い」人間として生きるのとは対照的です。自らの五感をフルに用いて、心身の全体で感じ知り、思い、考える能動的な人間として生きるのです。私を活かし、私が輝く！ もちろん、あなたも輝く！

少し長くなりますが最後にもう一度、執筆・出版時76歳だった人類学者・モンターギュが書いた『ネオテニー』(原著は1981年刊・日本語版は1986年刊)から引用しましょう。なお、ネオテニー・neotenyという言葉は、1800年代後半に、生物学の分野でつくられた造語で、ギリシャ語の「若さ」をあらわす neos と「延長」をあらわす teino を合わせたものです。

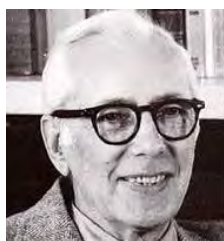
「私たちの学習のあまりに多くが、考えることなしになされている。しかし、そのような学習は労力の無駄である。この点、今日の学校は厳しく責められてしかるべきだ。そこには、ほとんどあるいはまったく【教育】がないのだから。今日、教育と見なされているのは、解くべき問題を提起するのではなく、覚えるべき解答の強要である。大量に丸暗記させ、ある決まった時期にそれを白紙の上に吐き出させる。そうして彼らの頭は、その後ずっと、ほとんど空っぽのまま。より多く知識を吐き出す能力を持っている者がもっとも頭が切れ、もっともすぐれているとみなされ、一番報いられる。このような教育は、形骸化された常習的殺人行為ともいえるもので、つまりは考える能力を徐々にむしばんでさっていく。学士、修士、博士と学位が進むにつれてしだいに、知的にも精神的にも、萎えていく。

丸暗記に慣れた人は、ごくたまにある限られた方法で考えること以外、ほとんど考えることができない。そして、読むことさえできない。ほとんど目だけで読んでいて、つまり頭を使って読むことはまれだからだ。・・読み手が義務や仕事としてではなく、読むことを楽しみ、その興奮をこどもに伝えるなら、こどもたちは本を読んでもらうことを何より楽しむ。「お話してよ」というのは、こどもの普遍的な語りかけだ。本を面白そうに読んでもらっていれば、こどもの頭はそれだけはやく、可能な限り敏感な、情報の処理・解析系となるだろう。

こどもは考えることが好きだ。彼らはそうしたがっている。実際、こどもの生活の全過程は、終わりのない問題解決の過程である。そしてこれは、ほとんど生まれた瞬間からはじまっている。・・考える衝動がこどものなかで強力であるうちに、考えることを【学ばなければならない】。このことは、常に心にとめておくべきである。そしてそのために、こどもは、考えることを、しかも確実に考えることを、【励まして】もらわなければならない。

「吟味されない人生は生きるに値しない」といったのはソクラテスだが、実際、おりにふれ、自分の主義を検討しない人は、おそらく、真に教養ある人と称することはできないだろう。すべて【よい観察】とは分析的で実験的である。そして、すべての思考は、たえまない試行と確認でなければならない。止むところのないそのような思考は、人生における大きなよろこびのひとつだ。若やいだ精神の維持にとって、精力的で生き生きとした思考ほどふさわしいものはない。一生懸命であればあるだけ楽しく、高揚し、報われるものとなる。多くの偉大な思索家が、彼らの仕事において【子ども】のようなのは、そのためである。彼らは、【さらにもっと】と貪欲であり、まさにネオテニー的なこどものようだ。」

(『ネオテニー』動物社・1986年刊)



(注)モンターギュ(Ashley Montague)は、訳者・尾本恵市さんのあとがきによると、1905年英国に生まれたアメリカ人で、解剖学者・人類学者であると共に、人間本性論に関する多数の啓蒙的著作により世界的に有名な人。ロンドン大学卒業後にアメリカに渡り、ラトガー大学人類学科教授、ニューヨーク大学解剖学科教授などを歴任。人種差別、男女差別、暴力肯定など、社会にはびこる偏った人間観を正そうとするヒューマニスト。1999年没

(3)愛情と理性。エロース

2013-7-2

第2章の(1)で、恋知を象徴する人物として、暴徒と化したキリスト教徒に惨殺された天文学者・数学者でもあったヒュパティアをソクラテスと共に紹介し、「愛と理性に基づいて生きる恋知者の受難」と書きました。

「愛情」と「理性」は、恋知者＝豊かな人間性と共に生きる者の条件と言えるでしょうが、第一義的に求められるのは「愛情」です。さまざまな人間の感情、その中でもとりわけ「愛情」の豊かさがなければ、「理性」には意味がありません。愛情がない理性とは、根を切られた植物と同じで、すぐに枯れてしまいます。それは無意味どころではなく有害であり、人間の生を元から破壊します。「理性だけがある」というのはあり得ない想定で、人間の生にとっては根源矛盾です。

わたしは、いま、「愛」ではなく「愛情」という言葉を使いましたが、それは、愛を理想的・抽象的なものとしてイメージしてほしくないからです。とりわけキリスト教でいう「愛」=agape(アガペー)と言われる神の愛、罪人である人間に対して神が恩寵として与える愛という考えとは異なります。愛情と呼ばれる感情は、まず、動物や赤ちゃんが可愛いという気持ちから生じるもので、理念でも要請でもありません。抑圧や過当な競争がないふつうの生活から自ずと生じる何よりも人間的な感情です。

愛情、愛するという心と行為以上に重要なものはこの世には存在しないはずで、子どもや動物への愛、友人への愛、家族への愛、恋人への愛、そこから人間愛へ。豊かでイキイキとした愛の感情がなければ、生きる意味も生じません。もしも人が、そのような内的には生きる意味を持たない人生を続けなければならないとしたら、脳の奥深く(脳幹)にある爬虫類の戦闘脳に依拠して「競争原理」に従うほかありませんが、それでは自他の人間性を破壊する不幸に沈むだけです。

愛とは、精神論ではありません。行為としては「可愛がる」ことと同じです。では、可愛がるとはどういうことか、あまりに易し過ぎるゆえに「分からない」=実際に出来ていないことが多いのを、わたしは長年にわたる子どもたちとの交流と父母との対話で感じています。とくに高学歴者の親ほど頭でっかち・理屈先行で、知らない=出来ていないのです。

以下は、小学3年生の教科書(教育出版)に載っている『のらねこ』(三木卓著)からです。



「はははあん。そうだったのか。」合点がいったリョウは言います。

「ねえ。きみ、もしかして、かわいがられるって、どういうことか知らないんじゃない。」

「知ってるわけないだろ。どこでも売ってないし。」
のらねこは、ぶすつとして言います。

「きみ、母さんは。」

「母さんなんて……。」

「ああ、やっぱりそうだったのか。かわいがるっていうのは、そばまで行って、相手にさわってあげたり、だいてあげたり、なでであげたりすることなんだよ。」

「へえ、そんなことするのか。で、そんなこと、なぜするのか。」

「ああ、それも知らないのか。かわいがってもらくと、とても気持ちがいいし、うれしくなるんだよ。」

.....

言うまでもなく、愛とは、まず始めは、可愛いという思いから生じる身体的行為であり、それは、どのような愛であれ、その絶対的基盤です。それが不足すれば、後は何をしようと虚妄です。

教科書に触れましたので、次に、子育て・教育の原理を簡明に記した白樺教育館・ソクラテス教室の基本文書をご紹介します。

お母様、お父様、すでにご経験の通り、子育て・教育の基本とは、文字通りの触れ合い＝だっこしたり、おんぶしたり、頬ずりしたり、ふざけあったり、また、心のこもった視線や感情の豊かな抑揚のある言葉で接すること、一言で言えば、心身全体による愛です。

言うまでもなく、理屈以前の嬉しい触れ合いがなければ、健全な心をもつ人間は育ちません。愛情とは、心身全体によるもので、子どもが自分を心底「肯定」できるのは、全身で愛されているという実感のみです。愛されて育つ子は、他者をよく受け入れ・愛することができます。

もしも、子どもを「言葉」だけで教育できている方がおられるなら、それは明らかに間違いです。子どもが著しい適応障害を起こすのは、「理性」の不足によるのではなく「愛」の不足によるからです。心身全体による愛は、人間のさまざまな営みを「よい」ものにするための基本条件なのです。

話を戻します。

結語ですが、愛と理性を海と船に例えてみれば、愛情という海を航行する船が理性です。海(愛)がなければ船(理性)には存在理由がありませんが、逆に、船(理性)が沈んでしまえば、愛は盲目となり意思を失い、真善美＝普遍性への想いも探求も消えてしまいます。愛と理性は片方だけ、というわけにはいきません。

恋知とは、なにかしらの理論で人間の実存(一人ひとりのかけがえのない生)を抑えつけないことではなく、愛情に基づく理性の発露であり、何よりも人間的な豊かさ、魅力・エロースによって生きることです。

いま、エロースと言いましたが、わたしの長年の哲学講座で「エロース」というと皆さん驚かれます。テツガクとエロス！！？ どういう意味ですか、と聞かれます。ソクラテスの弟子のプラトンが創った歴史上最も名高い学園『アカデメイア』の主祭神はエロースですので、これについて少し説明してみます。

恋愛の神は、ギリシャ語では「エロース」、英語では「キューピット」です。「エロース」は、哲学(正しくは恋知)の動力源であるゆえに、「アカデメイア」の主祭神とされました。

ソクラテス-プラトンの思想の核心は、人間の欲望を肯定するところにあります。荒々しい欲望も否定するのではなく、飼い馴らすものとされます。飼い馴らすことで、人間の最高の欲望=よいこと・美しいことそのものを求めるためのエネルギーとして生かせ、と言います。生命を支える荒々しい闘争心は、そのままでは人間性を破壊してしまうので、それを真善美=普遍性を希求する方向に変え・活かすというのが恋知(哲学)の核心です。

このように、恋愛の「聖なる狂気」(「俗なる正気」の対)をつかさどる「エロース」神は、深い納得=恋知(哲学)をつくるための動力源であるがゆえに、学園「アカデメイア」の主祭神となりました。後に現れたキリスト教の「アガペー」(神の愛)とは発想が根本的に違います。

なお、廣川洋さんによると(講談社学術文庫 1361「プラトンの学園 アカデメイア」)「アカデメイア」は、プラトンの私邸と小園と小規模な図書館と体育館兼対話場からなり、アテナイの市民は、自由にこの学園の教育と研究の様子を見学することができたといわれます。階級の別はなく、授業も形式ばらない友達どうしのような話しことばで進められていたので「友人たちの学校」と呼ばれていました。宗教的な匂いは全くなく、プラトンのシュンポシオン(英語読みではシンポジウム)は、くつろぎと対話の愉しみを求めて、知的香気の高い雰囲気のうちにお互いに愉快地に交わるのが常であったと伝えられています。



「飛ぶエロース」—古代アテネ北部のミュリナ(現在のトルコ)出土、ヘレニズム期(紀元前 320~30)の粘土を低温で焼いたお人形

そのような訳で、恋知(哲学)とエロースは、何よりも深く結びついています。エロースとは、人間的な魅力の源泉のことであり、また人を惹き付けるあらゆる事象の総称でもあるのです。

では、この小見出し(3)の最後に、最高のアイデア(理念)とされる【よい】の意味について、簡潔に書きます。

恋知(哲学)でいう【よい】とは、かたまじめな善(ぜん)のことではありません。生き生きとしていること・輝いていること・しなやかなこと・瑞々(みずみず)しいこと・潑刺(はつらつ)としてること・高揚感のあること・囚われのないこと・愉快的なこと・・・を言います。

「まじめ」ということも、学校や官の世界でいう「真面目」、厳禁の精神・既成秩序に盲従する「真面目」ではありません。ソクラテスとプラトンのいうまじめとは、恋愛におけるまじめ＝真剣と同じです。興味のある方は、世界文学最高の古典の一つと言われる『饗宴』(プラトンによるソクラテスの対話編)をお読みください。



女性と対話するソクラテス(レリーフ制作は紀元前2世紀)

(4) 哲学から恋知へ

2013-8-25

哲学というと、テツガク、てつがく・・・難しいし、わたしには関係なさそう、と言われることが多いです。

わたしは高校の時から哲学書を読み始め、大学は哲学科に在籍し多くの哲学書を読んできましたが、確かに、自分の頭で元に戻して考えるということと哲学書を読破することは直接には関係しません。

ベストセラーになった『ソフィーの世界』を読んでもみると、人類が、「考える」ということに取り組んできた歴史の面白さを知ることができますし、自分で考えてみるものが



発売以来、白樺教育館では、哲学するための触媒として使用しています

刺激され、そのためのヒントがえられます。既成秩序に従うだけの生き方の愚さを感じますし、外＝世間的価値に脅迫されて、「私」固有の内的宇宙＝精神世界を広げ深めない生き方のつまらなさが分かります。

ただし、わたしの長年の経験から断言できますが、哲学書を毎日読むような生活を送ると、自分の頭では考えていないのに、ふつうの人には分からない高尚なことを考えているように見えるテツガクシャになってしまいます。哲学も「専門知」と「情報知」に変質するのです。哲学史の知識を覚えること、欧米の学者の論文を読むこと、言語パズルを解くのが哲学教師で、その種の本の愛読者が哲学ファンということになります。

それでは自分の人生を豊かにするのに資することがなく、哲学には存在理由がなくなります。生活世界から切れた専門知としての哲学では、社会問題をきちんと考える基盤にすらならないのは、20世紀最大の哲学者と評されるドイツのマルティン・ハイデガーが進んでナチ党に入党してヒトラーに過激な進言をしたことで証明されますが、日本でも明治維新政府の伊藤博文が中心となって作った「天皇教＝靖国思想＝国体思想」を補完する思想を述べたのが戦前の二大哲学者と言われた西田幾多郎と田辺元であることを知れば、どなたも唾然となるはずです。

キリスト教会による「スコラ哲学」のみならず、16世紀にヨーロッパで起こった「近代哲学」以降も、哲学を言語による堅固で歴大な建造物とする見方が支配的で、「言語(書き言葉)至上主義」に陥っています。自分の経験を基に自分の頭で考える古代ギリシャ出自の恋知の営みは「民＝素人」のものとされ、それとは別次元に強固な理論の体系としての哲学があるという妄想＝錯覚が今日まで続いています。

わたしは、長い間このような現状を変えることに取り組んできましたが、数年前にまったく未知の雑誌社(北海道の「カムイミントラ」)から「白樺教育館」の考えと実践について記してほしいとの依頼で書いた短文がありますので、以下に載せます。



民知としての哲学＝恋知について

「白樺教育館」に通う高校生・大学生・一般成人者の方は、哲学を学んでいます。

というと、哲学書を読解し、哲学講義をしているところと思われるでしょうが、少し、いえ、かなり違います。

わたしは、フィロソフィーを「恋知」(れんち)と直訳し、その初心を活かそうと考えているのです。この恋知としての哲学は、ふつうの生活者が、日々の具体的な経験に照らして、ものごと・できごと・人生・社会の意味と価値について自分の頭で考えてみることなので、これを「民知」と呼びます。

哲学の本をまったく読まない、というわけではありませんが、本の読解は必要最小限にとどめています。恋知を、哲学書を読むことから解放しないと、ほんとうに「私」が感じ・思うところから自分で考える営みが始まらないからです。自問自答したことをみなで聴き合い・言い合う自由対話こそ「哲学する」醍醐味なのだと思います。書物はそのための触媒に過ぎません。

このような営みは、事実について調べ覚える勉強・学問(「事実学」)ではなく、意味と価値を問う思考なので、「意味論」と言いますが、この意味論としての知を豊かに広げることがないと、「知」は、他者に優越するための道具にしかありません。受験知のチャンピオンになるための知は、自他を生かしません。競争の知から納得の知へのチェンジ！！というわけです。

人類は、「国家と文明」成立以降、「競争原理」に支配されてきましたが、いま、文明の大転換をはからなければ、どうにも先が見えません。競争ではなく納得(腑に落ちる)を原理とする生き方がそのための鍵ではないか、そうわたしは考えています。外なる価値を追いかけ、他者との比較や勝ち負けで生きるのではなく、内なる意味充実を基準として「納得原理」による人生を歩む人を恋知者＝哲学者と呼



2008年07月号／
ウェブマガジン第22号
(通巻142号) [ずいそう]

ぶわけですから、わたしたちはみな哲学者になるべきだ、と言えるかもしれません。

上位者に盲従する反・哲学的な生ではなく、「私」から出発し「私」の固有のよさを開花させながら生きる人でなければ、シチズンシップに基づくほんらいの公共性・社会性を獲得することもできないでしょう。「一般意思」(公論)の形成という社会生活を営むうえでの一番大事な営みも、「私」の実存の輝きに照らされなければ、意味を持たず、色を失ってしまいます。

わたしは、小中学生の意味論としての学習に取り組んで32年、高・大学生と成人者との民知としての哲学＝恋知の実践を続けて21年がたちますが、さて、これからが本番です。みなさん、ぜひ一緒に！！ 2008, 7

武田 康弘 (たけだ やすひろ・白樺教育館館長・白樺文学館初代館長)

恋知とは、他の個別学問とは別の一つの学問ではなく、あらゆる個別学問を支える「人間・人生の善美とは何か」を問う営みです。したがってそれは、客観的な学ではなく、主観性の知ですが、多くの人々が誤解しているように、この主観性の知の探求＝その深さと豊かさこそが、あらゆる客観的学問に意味と価値を与えるのであり、その逆ではないのです。人類の最高の知性と品位は、恋知の営みによる主観性の知の深さと豊かさにこそあるのですが、残念なことに、いまだにその理解→了解が得られていないのが現実です。それは今後の世界・人類の最重要な課題と言えます。

わたしは、参議院事務局企画調整室からの依頼で、『立法と調査』(別冊2008. 11)に「キャリアシステムを支える歪んだ想念」という論文を書きましたが、そこでは、わたしの言葉である【客観学】と【主観性の知】という概念を用いて、日本の知的教育の問題点を簡明に記しました。その一部を以下に写します。

「読み・書き・計算に始まる客観学は確かに重要ですが、それは知の手段であり目的ではありません。問題を見つけ、分析し、解決の方途を探ること。イメージ



『立法と調査』(別冊2008. 11)
参議院常任委員会調査室・特別
調査室

を膨らませ、企画発案し、豊かな世界を拓くこと。創意工夫し、既成の世界に新たな命を与えること。臨機応変、当意即妙の才により現実に対応した具体的対応をとること。自問自答と真の自由対話の実践で生産性に富む思想を育てること・・・これらの「主観性の知」の開発は、それとして取り組まねばならぬもので、客観学を緻密化、拡大する能力とは異なる別種の知性なのです。客観学の肥大化はかえって知の目的である主観性を鍛え豊かにしていくことを阻んでしまいます。過度な情報の記憶は、頭を不活性化させるのです。

従来の日本の教育においては等閑視されてきた「主観性の知」こそがほんらいの知の目的なのですが、この手段と目的の逆転に気づいている人はとても少ないのが現実です。そのために「知的優秀の意味」がひどく偏ってしまいます。」

(P.51)

知に対する見方・態度の酷い歪み(客観神話)こそ、わが国の(わが国だけではなく先進産業国全体でしようが)最大・最深の問題であり、あらゆる困難や不毛な対立はそこから出てくることを知らなければ問題解決の可能性はありません。各自が「主観性の知」を豊かにする努力を始めること、そのための条件整備をすることが何よりも先に求められるはずです。

では、主観性の知を生み出すにはどうしたらよいのか。

主観性の知は、何よりもまず自分の五感で「感じる」ところに始まります。したがって、主観性の知を育成するためには、さまざまな事象を「感じ取る」練習が基盤となるわけです。常に生活の中で直接経験につき、そこから「感じ取りつつ知る」という営みを習慣化する必要があります。



主観性の知と意味論の学習の拠点
=『白樺教育館』のブロンズ彫刻
「ての取っ手」中津川督章作。
教育館全景は29ページです。

それと同時に、感情の多彩さ・豊かさの育成が欠かせません。そのためには、日々の内容の濃い豊かな対話と共に、詩や物語、音楽や美術、映画、ドキュメント・・・をよく味わい知ることが大切です。偏った感情ではなく、こまやかで深く、「共感性と生命愛に満ちた感情」の育成が、人間のよき生の基盤となるからです。その基盤をつくるための条件が、その人の存在のすべてを肯定する豊かな愛情であることは、(3)で述べた通りです。

更に、「センス」を磨くことは極めて重要です。数学の問題を解くにも、研究課題を見つけるにも、ことばを扱うにも、論争するにも、ものを選ぶにも、よいセンスがなければ成果は得られません。センスを磨くためには、自分から積極的にものごとに関わり、そこで失敗と成功を繰り返すことが求められます。他者の判断に従うのではダメで、己を賭けて選択することがないと、センスはほんものになりません。センスとは情報では全くなく、自分自身の内から湧き出る「よきもの」に目覚めることなのですから。ほんらい、情報とはヒントでしかなく、それらは「私」の内なる世界に従い奉仕するものなのです。

知の目的とは、主観性の知(意味論としての知)であり、それは人間が善美に憧れつつよく生きることに直結している知なのです。人間を幸福にするのは主観性の知の力です。

ところが、日本の教育はこのことについてまったく理解→了解していないために、ただの事実学・技術知・客観学を集積することが価値だと錯覚しています。「客観神話」に深く侵されているのです。これでは、知は競争(勝ち負け)でしかなくなり、生の豊かさを育むものにはなりません。この現代の教育と学問の危機を乗り越えるには、「競争原理」から「納得原理」へのコペルニクス的転回が必要です。「私」が、よーく見、よーく聴き、よーく触れ、よ〜く味わい、よ〜く想い、よ〜く考える。それを繰り返すことがなければ、全ては砂上の楼閣で、言葉は観念遊戯に過ぎなくなります。全身で考え生きなければ、人間がよく生きることに資する「腑に落ちる知」は得られないはずです。



算数も漢字も苦手で苦痛だったのはるかちゃん、今はご覧の通り(音読はもとから得意で見事)。

では、ここで、用語法について記します。

【恋知】(ほんらいの哲学する)という営みは、知のありようという面から見れば【主観性の知】と言えます。対概念は、客観知です。

また、ばらばらな事実、客観的知識(公理・公式を含む)は、そのままでは意味がありませんので、生きて働かせるためには、自分の経験の中に位置づけなければなりません。そこで獲得した知を【意味論】と言います。

客観知の集積である「事実学」は死んだ知に過ぎませんので、本質に向けて問い、人間の生に資する意味ある知を目がける学問が必要です。それが【本質学】です。

というわけで、これらは、自分自身から発し・戻り、心身全体で会得しようとする営みですので、【納得＝腑に落ちる知】です。

また【民知】という言葉は、「官知」(形式知・公式知)とは次元を異にする生きた有用な知の総称です。民知としての法学、民知としての建築学、民知としての経済学、民知としての哲学……。

いま、わたしは「自分自身から発し」と書きましたが、この「自分」=「私」から発するという言い方は、多くの哲学・思想関係の研究者が誤解・混同しているように、エゴイズムにつながるものではまったくありません。こういう混乱が生じる原因は、「私」という言葉を、存在と所有の二面を区別なく使う習慣にあります。存在とは《豊かさ、優しさ、愛らしさ、強さ、大きさ…》のことですが、所有とは《知識、履歴、財産の量》のことですので、次元を異にする概念です。

「私」から発する・「私」を中心に考える・「私」の関心と欲望から始まるという思想を、【所有】という意味で見れば、確かにエゴイズムに陥るほかありません。俺は専門知識の所有者だからふつうの人間より優れているとか、金品・財産を多く持っているから人の上に立つ人間だとか、高い学歴・職歴を所有しているから、あるいは政治権力を持つ人間だから偉いというような想念は、おぞましいエゴイズムそのものです。

しかし、「私」の健康な心身をつくる実践・「私」の主観性の知を鍛える営み・「私」が憧れ想う世界への探求……「私」の【存在】を優れた魅力あるものとする努力という意味で「私」につく・「私」から始まる・「私」の関心と欲望と云えば、それは、人間の生の基盤＝原理であることが了解されるでしょう。善美を憧れ求める心は、「私」からしか始まりようがなく、「私」に位置づくほかにはありません。この簡明な原理中の原理を明晰に自覚することで「自他の存在」は始めて意味づき・価値づきます。美辞麗句や術学哲学や上下倫理という人心支配のインチキ思想ではなく、自他の存在を深く肯定できるほんものの思想は、「私」からしか始まりようがないのです。



「所有」の象徴—現代のバベルの塔の都庁

最後に重要な事実を。

存在のよさを目がけるという意味での「私」につくことは、その子(人)の【存在】が肯定されていれば、誰でもが始める自然な行為です。その子(人)の関心と欲望が否定されたり、操作誘導されたり、閉じ込められたりせず、自由意志が尊重され、心身全体で愛されれば、人は、誰でも「私」の存在を優れた魅力あるものにしようとする営みを始めます。怠惰で醜い存在にはなりませんし、知識、履歴、財産の【所有】の量によって威張る愚か者にもなりません。



魅力ある豊かな「存在」の一人・
アルバート・アインシュタイン

恋知とは、私の存在に悦びと輝きをもたらし、私の存在を豊かに魅力あるものとする何より素敵な営みですが、これこそが、何より他者を利することにもなります。裸の【個人】として互いの存在を肯定し合うことで自他は共に生きるのです。

所有から存在へ。

追記：自民党の憲法草案が「個人」という言葉をすべて削除したのは、近代思想以前の「国体思想」に基づくもので、日本の知的水準の驚くべき低さを世界に向けて発信したのです。日本文化を愛した日本通のアメリカ人・ライシャワー駐日大使が亡くなる少し前に NHK の元旦インタビューで、「これからの日本に望むことは？」との質問に、「これからの日本は、人類社会の一員になるように努力してほしい」と応えていたのを思い出します。

(5) まとめ

2013-9-25

第2章「恋知とは何か」を終えるにあたり、どうしても知っておきたい幾つかの事実とそれが意味するもの、そこから得られる思想について書きます。

ソクラテスが死刑の判決を受け毒杯を飲んだ時、恐ろしいほどのショックを受けた弟子のプラトンは、書き言葉を残さなかったソクラテスの言動＝思想を残すために、発言の背景と流れがわかるように「劇作」として対話編を書き始めますが、そ

れと同時に私塾の延長としての学園『アカデメイア』をつくりました。エロースを主祭神とする自由で知的香気あふれるこの「友人たちの学校」(敬語ではなく友達同士のような会話ことばの授業)は、次第に発展し、史上最も有名な学園となりましたが、後に現れたキリスト教との対立によりローマ時代に禁止・廃校となります-「以後、何人も恋知(哲学)を教えるはならぬ」



現在のアテネにあるアカデミー正門前、左座像はソクラテスで右がプラトン、中野牧人君撮影

自分自身の頭で考えようとするギリシャ出自の理性的態度は、ユダヤ出自の絶対神を信じるキリスト教とは水と油であったため、恋知(哲学)者とキリスト教徒は対立し、紀元前 387 年から 900 年間以上続いた『アカデメイア』は、東ローマ帝国皇帝のユスティニアス 1 世の命令により 529 年にその幕を閉じたのです。

ヨーロッパでは、「12 世紀にはじまる翻訳の世紀」(アラビア語またはギリシャ語からヨーロッパの言語であるラテン語に翻訳する作業で、16 世紀にはじまるルネサンスへと続く)において、古代ギリシャ出自の恋知は、キリスト教に適合するように根本的に変えられていきます。このキリスト教化された哲学は「スコラ哲学」(ラテン語のスコラとは school = 学校のこと)と呼ばれますが、この「キリスト教神学による恋知の換骨奪胎」は、古くは、キリスト教がローマの国教とされた 313 年のナント勅令の頃からはじまりました。

※ なお、ヨーロッパの翻訳の世紀の前は、7~8 世紀にはじまるギリシャ語からアラビア語へのイスラムの翻訳の時代があり、ギリシャの学問は、最初はアラビア語に翻訳され、インド経由のゼロの発明による十進数や化学や医学や天文学などがイスラム文化として花開き、それが、12 世紀頃からラテン語に翻訳されてヨーロッパ世界に伝えられたのです。

こういう事情に無頓着な思想関連の学者は、「ギリシャ出自の恋知」と「スコラ哲学とその改革である近代ヨーロッパ哲学」を似たようなものとして扱う愚を平気で犯しますので要注意です。なお、学問史の分野では、村上陽一郎さんの研究・著作が優れていますので、ご参照ください。

わたしたちがよく耳にする哲学者といえば、近代哲学の祖と言われるデカルトであり、ドイツ哲学のビッグネーム、カントやヘーゲルですが、彼らはみなクリスチャンでしたから、ギリシャ出自の恋知と、世界を創ったキリスト教の神への信仰とい

う相容れない思想を統合するために、大変な力業を用いることになりました。ほんらいは出来ない統一を図ろうとしたために、極めて難解な論理を必要とし、それが今日まで恋知(哲学)が具体的現実の中で働く有用な方法にまで進めず、「哲学書の読解」という狭い世界に留め置かれてしまう原因となっています。

もちろん、近代哲学は優れた思想をつくり、人類的な普遍性のあるアイデアに溢れていますし、じっくり読むことで思考の訓練にもなります。ただし、先にも述べました通り、哲学書の読解ばかりをしていると、自分の頭では考えないで、哲学書とその歴史世界を知ることによって今を超える価値を感じてしまうという逆立ちをもたらしますので、要注意です。メデューサのごとく、文字による哲学体系が今を生きる「私」の存在=イキイキとした生を石化させてしまいます。言語=理念世界への集中・飛翔と、五感・心身全体で生きる現実生活とはバランスが取れないと人生がスポイルされてしまいますし、



メデューサ(ギリシャ神話)は、見る者を石にしてしまう女神で、ペルセウスによって退治された(彫刻はルネサンス期の奇異な天才ベンヴェヌート・チェッリーニによる)。

西ヨーロッパ哲学がキリスト教化された思想であることを忘れて読んでいると、知らぬ間に「神学的精神」に染まってしまうので、危険です。神学的思考とは、裸の人間性を肯定し、心身全体で感じ知り、豊かに生きるという発想とは逆に、言葉や特定の観念・理論に縛られて自他を固い檻にいれるような思考と生き方のことです。理論=言語中心主義の強張った貧しい発想は、現実の生からエロースを奪います。

これからの哲学は、キリスト教化されたスコラ哲学とその改革である近代哲学の言語ゲームから、初心の恋知の営みへと変わらなければならないはずです。神学的=権威的発想とは無縁となり、自分の頭で考え・意味をつかむという生き方ですが、ではそのためにはどうしたらよいか。先に「哲学は、具体的現実の中で働く有用な方法にまで進めず」と記しましたが、「キリスト教などの一神教世界や特定の哲学体系、また日本の天皇史観(日本主義)などのイデオロギー」と折り合いをつけようという暗黙の意識・底意から自由になれば、思考は明晰化されスッキリと進みます。宗教や主義や思想の体系から解放されないと、イキイキ伸び伸び、自由に豊かな思考は始まらないのです。

「女神メデューサ」を退治しないとイケませんね。

では、スッキリと思考を進めるには何が必要かといえ、こどものころからの毎日の学習仕方です。

算数の学習を例にとれば、自分の頭を悩ませて解くのではなく、公式を暗記し当てはめて解答するというのは「外」からの方法で、「内」からの意味理解が得られません。

また、音読の場合で言えば、アナウンサーのようにスラスラ読もうとするのは「外」を意識した読みでダメです。つかえてもよいので、意味を捉えながら、情景を思い浮かべながら、読みます。

教科の学習の具体的な方法について書き出すと際限がないので止めますが、ポイントは、自らの具体的経験に照らしながら、内からの了解・納得・意味把握を目がけるところにあります。そのような態度＝頭の使い方を習慣として身につけることが何より大切です。暗記と公式、情報処理のスピードを競う「外」的な訓練を中心に生きると、内的な意味充実のない紋切型の「優秀者」にしかたれません。



集中して自らの力で数学を解く
山田萌生君
(白樺教育館ソクラテス教室)

身体の動かし方もNHKの「みんなの体操」のように、外側の筋肉を使ったスタイル優先の方法はよくありません。脱力して腰からのモーメントで腕や足を動かすことで内側の筋肉を使えば、中からほぐれますし、体幹が強くなります。

心の用い方も同じで、「外」を気にして形優先では、中身の豊かな交流は出来ませんので、自他に悦びはやってきません。心の「内」から立ち昇る思い・考えに素直になると、世界は豊かに大きく広がります。

キーワードは「内」です。頭も体も心も、内からを心がけると芯の強さが得られます。

「外」を気にし、見栄えを優先し、外面的に生きるのは、日本の集団同調の世界ですが、それは、同時に神学的な絶対を求める生き方でもあるのです。前にも書きましたが、みなが言うからという「一般的な正しさ」を求めるという発想が、何かの理由でヒステリー化すると「絶対的な正しさ」を求める心に変わります。絶対的真理がないと生きられないというのは精神疾患ですが、心身全体で愛されたことがなく、疎外感・不全感が強い人は、多数派に同調するか、絶対的真理を求めて従うか、ということになりがちです。両者は一つメダルの表裏に過ぎません。

第三の生き方＝「普遍的なよさ」を求めるのは、「私」からはじまる内発的な生を交感・交歓・交換しながら公共性をつくり出そうとする営みによりますが、そのため

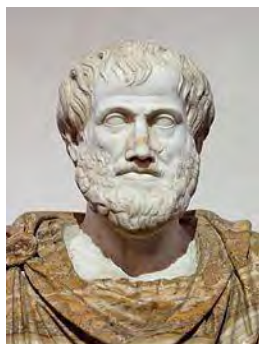
には、集団同調による「無思想」と、神学的精神による「絶対」を共に越えなければなりません。

哲学無しでも、神学や主義を隠し持つ哲学でもなく、裸の個人として「私」の存在を肯定し合うことで自他を活かし合い、愛情と理性に基づく人間性豊かな生を可能とする恋知の営みは、考え、試し、確かめ、対話しながらよりよい生き方を模索していくのです。権威者や権力者に従うのではなく、他者や周囲の空気に合わせるのでもなく、「私」の内なる良心の声＝《【善美への憧れ】という不動の座標軸》につく生き方です。

強い一神教と集団同調を共に越えた「普遍性をもつ個性豊かな生き方」、それが、《善美への憧れを不動の座標軸とする恋知の生》です。

ここで少し知の歴史(学問史)の話をしてします。

紀元前6世紀、タレスに始まる古代ギリシャに起こった(現代のトルコのみレトス)「自然哲学」(自然の素材や動因とは何かを探る)は、200年ほど後、ソクラテスと弟子のプラトンによる発想の大転回で、「恋知」(善美のアイデアに憧れ、人生を吟味する生き方)へと変わり、それはさまざまな面白い思想＝実践を生み出しました。



「学問の祖」と言われるアリストテレスは、恋知の核であるアイデア論を否定したため、哲学の神学化への道を開くこととなった。

ところが、プラトン(ソクラテス思想)に教えを受けたアリストテレスは、恋知・哲学の核心であるアイデア論を否定し、再び「自然哲学」を中心とする思想に戻ってしまいます。倫理学も自然哲学から導かれるものとなります。

彼の『自然学』(正式には『自然学講義』)は、自然研究の原理論ですが、『形而上学』第一巻は、『自然学』において定義された概念・思想を前提にしていますので、『自然学』は、アリストテレス哲学全体の原理を提示したものと、言われます。

そこには、有名な「四種類の原因」が提示されています。生成と消滅、自然におけるすべての変化の「原因」は4つあり、それは、「質量・素材因」と「形相ないし範型」と「始動因」と「目的因」だとされます。いま詳しい説明は省きますが、問題は、最後の「目的因」です。当然、人間の製作物なら目的はありますが、自然(の変化)に目的があるとは？彼は、自然の研究者は、四原因をすべて知らなければならないと言い、雨が降るのも偶然ではなく、穀物を成長させるという目的がある、と言います。

この「自然によって存在し生成するものの中には目的が内在する」という主張は、キリスト教が水と油のギリシャ哲学を換骨奪胎していく原因となった、とわたしは見ています。神＝創造神が人間を含む全自然をつくったとする一神教であるキリスト教(前身のユダヤ教・旧約聖書に始まる)にとって、人間と自然の一切を説明する「神学≒学問」をつくることは必須でしたが、そのためには、キリスト教思想とは全く異なるギリシャ哲学(世界最高峰の知)を使うほかありませんでした。ソクラテス・プラトンの「善美への希求という座標軸」(それがイデア論の核心)をもつ恋知においては、自然研究(研究者の知的好奇心による)と、人間の生き方(万人にとって必要な探求・吟味)とは次元を異にする知との考え方でしたので使えませんが、アリストテレスの哲学は、すべてにおいて「万能の神の計画」があるというキリスト教神学には好都合で、ピタリとはまります。自然学と倫理学とは一つになり、壮大な物語がつかれますので、全世界・全人類をキリスト教神学≒学問で覆う(支配する)ことが可能となったのです。

では、なぜ古代ギリシャのアリストテレスが「目的因」という非学問的な思想を哲学の中心に入れたのでしょうか。それは、彼が、知の核心であるイデア論を否定することでタレスに始まるプラトンまでの全ギリシャの知を統一しようとする意図をもったからなのですが、今は詳しくは書けません。

問題の核心は、「善美のイデアへの希求」という座標軸がなくなると、人間の生の意味と価値について吟味する足場が失われてしまうので、人間と自然のすべてを貫く「目的因」という物語をつくらざるを得なくなったことにあります。これによって、倫理や政治までも自然学から演繹されることになりましたが、それは、近代のドイツ観念論を通して遠く戦前の日本を代表する哲学者・田辺元(数学・物理学・哲学)にも影響し、天皇制の正当化の理論＝「天皇を中心とする日本の国体は、太陽系と同じで、宇宙の原理に合致する」にもなっています。

このように自然学から意味不明の演繹をする異様な思考は、すべてに目的があるとする神話的な考え＝「目的因」と重なっていますが、わたしはそこに、幼児のもつ「万能感」の延長がつくる歪みを感じ、怖さを覚えます。肥大した外的自我の怖さです。それは、国家主義の論理を生み、一人ひとりの生への抑圧を正当化します。更に言えば、自然征服という人類中心のエゴイズムが生じたのも、この「目的因」という強引な概念のねつ造に深因があるように思えます。

ここでさらに歴史を遡ってみると、キリスト教など世界の三



三大宗教の誕生地・エルサレムの市旗

大宗教(旧約聖書のユダヤ教、新約聖書のキリスト教、コーランのイスラム教)を生んだ【セム語族】の文化と、仏教やギリシャ哲学を生んだ【印欧語族】(インド・ヨーロッパ語族)とは、大きく異なることを言わなくてはなりません、数千年前のインド～中東～ヨーロッパの民族移動と二つの文化の型の大きな違いは、今はその事実の確認だけに留めます。押さえておきたいポイントは、インドの釈迦(ブッダ)による仏教とギリシャ哲学は親近性を持っていることです。



内的充実の極み、自らの純粋な悦びの行為として彫刻をつつたマイヨールの「夜」・上野の国立西洋美術館で。撮影は筆者

話を戻します。

わたしの提唱する恋知とは、善美への憧れを不動の座標軸とする生き方のことですが、それはまた知の方法でもあり、各教科・学問の中で生きて働くものです。それ自身が自立・独立した体系ではありません。あらゆる知と生活世界に価値と意味をもたらす優れた態度のことです。内的に、内側から、内発的にですが、それを可能にするよい方法は、近くを見るのではなく、視線を遠くに飛ばす(例えば、空・雲という不定形なものを見る)ことですので、習慣づけるとよいでしょう。

強い宗教(一神教)がつくる「神」という絶対観念ではなく、また、世間の価値観に呪縛される世俗教(例えば、東大教)でもなく、第三の道である恋知の生には、特権的な人や場は、一つも存在しません。人間の生のよし悪しの基準は、「生活世界」(日常生活、仕事、活動、趣味)の中にのみありますので、日々の生活において感じ想うことを繰り返しよ～く見つめ、反省のふるいにかけることで、「私」の意識を明瞭で豊かなものにすることが何より大切になります。それこそが不動の座標軸(真理というのではなく、「正しさ」が現実的意味を持つ生の基準)となり、わたしたちの人生を支えます。善美への憧れと探求こそが人間的な徳と得をもたらすのです。

ナンバー1 でなくてもよい、オンリー1 であれば、ではありません。誰もがみなオンリー1 であることを自覚するのが何より大切。ナンバー1 としてのナンバー1 では人間的には価値がありません。ナンバー1 とは他との比較でしかなく、単一の基準で測った結果ですので、競争主義者(機械人)の思想です。オンリー1 として生きる人が、結果としてナンバー1 と評されるのは結構なことですが、さらに、そのよ

うな人間評価自体への異議を唱えた人もいます。実存主義者のジャン＝ポール・サルトルは、ノーベル文学賞を辞退したのです。

それでは、『白樺教育館』の標語を貼り付けて、第2章「恋知とは何か」のシメとしましょう。

他と^{ひかく}比較するな。

他と^{きょうそう}競争するな。

自分の

深い^{なつとく}納得を目がけよ!

あなたもわたしも、

オンリーワン

Only One であることを^{じかく}自覚しよう!



追記

わたしは、この章で、人間の人的生の本質について書きました。人間の望ましい生のありようをできるだけ明瞭に示せば、生をより魅力的なものへ、生きる価値の大きなものへ、豊かな意味を持つものへ、と動かすことができるのではないか、そう思い試みました。個々の活動や仕事、具体的な事柄の知識や手法については、優れた人が大勢いますので、それらについては彼らにお任せします。



武田康弘

1952年5月東京神田生まれ。
写真は2013年(61才)
『白樺教育館』で小学生撮影



恋知

φιλοσοφία
φρόνησις
Philosophy



アカデメイアの神「エロス」

Love of thinking

事理学ではなく、意味論の世界へ。
(受験知) (本質論)

—古代の実存思想—

ソクラテス 前469~399
ブッダ 前463~383(中村元)
老子 前320~250(保立)

ブッダ(釈迦)の中心思想は「天上天下唯我独尊」。SMAPの「世界に一つだけの花」は、その分かりやすい現代バージョン。すべては「縁」により起こると言う真実を明らかにし、拠り所は自分自身と法則であると説いた。慈悲に満ちている。ほぼ同時に活躍したソクラテスは、エロス(恋愛)を動力源として個人の考える力と善美に憧れ真実を求める生き方を至高とした。問答法により、思慮の点では、知識人は、ふつうの人に劣っていることを示した為に恨みを持った。女性原理につく中国の老子は、水のようなしなやかさを理想とし、悠然と道を歩み、内から湧れるパワーある徳を説き、孔子の徳徳を批判した。女男の性愛による結びつきを重視し、そこから公共や国を考えた。「学を絶てば憂いなし」

ネオテニー(幼態成熟)一人間の生物としての特性

neos(若さ) + teine(延長) ヒトは、大人にはならない。

20世紀の人類学者・モンターギュー

競争原理から納得原理へ。

それが人類進化のほんらいの方向。



他力念仏の法然門徒は、後鳥羽上皇らにより弾圧され、親鸞は佐渡に島流しとなり、4人が死罪となる。

親鸞は、中世日本の実存思想の中心。「善人でさえ往生できる(救われる)のだから、悪人はなおのこと」浄土真宗はわが国最大の宗派で、晩年のハイデガーは、西欧哲学から離れ、親鸞思想に傾倒、心酔した。



親鸞 1173~1262

ハミ出すくらい



愛もあげよう

「不滅の恋人」に象徴されるように、恋愛はベートーヴェンの創作の源泉。自由と平等の[共和制](王や貴族はいない)による人類の解放と個々人のよるこびを歌う交響曲9番「合唱」は、全世界で最も敬愛されてきた傑作。今なお現代的・未来性をもつ作品も多い。



ベートーヴェン 1770~1827

第九 よるこびの歌



ルソー 1712~1778

生前は、恋愛小説家として著名。同時に発表された「エミール」(教育論の古典といわれる大著)と「社会契約論」(古代アテネの直接民主制に範をとり、人民主権による社会の原理を示した)は、近代民主主義を拓いた名著。



サルトル 1905~1980

人間は、自由から逃げることはできない。実存的倫理、実存的精神分析。20世紀フランスの実存主義者サルトルは、ノーベル文学賞を辞退。日本での受容は竹内芳郎が中心。

意味をつかみ、真実・truthを探求する。

人間の価値は、知識・履歴・財産の所有ではなく、存在の魅力にあります。そこにいるだけでよいのです。

外的(世間的)価値に合わせ従うのではなく、内的真実と意味充実の生を歩むのが、人間のほんらいの姿です。

沈思と自問自答、静かに自己を見つめ、内から内発的に思考する。その土台のない「対話」は無意味です。

序列と形の日本文化を超えて、内容と意味にあふれる世界へ!

武田廣弘

Greatest Love of all

リング・クリド 魂の詩



作詞 リンダ 1948-1986 歌 ホットニー 1963-2012 アリの自伝映画 1942-2016

モナドアリ 主題歌

ホットニー・ヒューストンの一番愛した歌
「自分自身を愛することを学べば、それは、最も偉大な愛となる」
(リング、訳タケダ)

世界に一つだけの花

SMAPの皆が愛した最大のヒット曲。
(作詞・作曲・横原敬之)



特別なオルガン

「感じ 想い 考える 私」が座標軸

よい・good 美しい・beautifulへの憧れ

青空を見る習慣を! 創立1976年~

屋上で天体観望会 1979年~

ソクラテス教室

1976年~ 2015年第40回式根島キャンパブダイビング(63歳)



2008年1月参議院での討論会(55歳)

白樺教育館

2014年 白樺教育館・新館落成10周年(62歳)

実存は、本質に先立つ

私と共和制
楽しい公共社会を生きるために
+ 人類思想の三分類と志知

武田廣弘著
白樺教育館

天皇は、国事行為から解放され、文化と国際親善に専念。人権の回復と共和制へのスムーズな移行が必要。江戸城ではなく、ほんらいの住まいである京都御所に戻れることが求められる。

武田 康弘 プロフィール (ウィキペディアより引用)

武田 康弘(たけだ やすひろ、1952年5月14日 -)とは、日本の哲学者(恋知者)、教育者。白樺教育館館長、白樺文学館のコンセプト立案者及び初代館長。

現代の大学などで教えられる一学問としての哲学を批判し、ソクラテスによって生み出されて定義された本来の意味として、哲学を捉えなおす恋知思想の提唱^[1]や、現在の公務員制度を維持する思想的土台への批判とその観点による参議院の現職公務員に対する講義^{[2][3][4]}、中学生等に対する丸刈り強制(丸刈り校則)に象徴される管理教育への批判や体罰問題等の是正を行った活動^[5]などで知られる。また、2009年に参議院事務総長より参議院行政監視委員会の客員調査員に任命され、国会に勤務する官僚へ日本国憲法の哲学的土台について講義を行う^[6]。

略歴

1952年、東京都千代田区神田須田町生まれ。

学生時代より大学内哲学に疑問を抱いており、これがのちの思想形成に繋がる。

1976年に千葉県我孫子市に私塾を開設、同時に『我孫子教育研究会』を主宰し児童教育の在り方を模索するかたわら、1982年にジャン＝ポール・サルトルやメルロ・ポンティ等の邦訳者・紹介者として知られる哲学者、竹内芳郎に師事する。

1987年、自身の手で『我孫子哲学研究会』を、1989年には竹内と共に『討論塾』を立ち上げ、市民の政治参加のための新しい思想(公共思想)を考え、またそれを支える市民同士の対話文化を生むための活動などを行う^[2]。この時の活動と思想は、第8・9・10代千葉県我孫子市長である福嶋浩彦による我孫子市政運営の、思想的土台となった。また同時期に我孫子市の中学校で行われていた管理教育を是正する運動を行い、体罰問題などの是正を行う^[5]。

1999年、我孫子の地に『白樺文学館』を創設する構想を練り、武田哲学に賛同して



武田康弘(2011年1月撮影)

生誕 1952年5月14日(68歳)

日本 東京都千代田区神田

時代 20世紀 - 21世紀

地域 現代思想

学派 在野

研究分野 哲学

主な概念 恋知

影響を受けた人物:

ソクラテス、プラトン、
ブッダ、老子、親鸞、
柳宗悦、ジャン＝ポール・
サルトル、アシュレー・
モンタギュー、竹内芳郎

影響を与えた人物:

福嶋浩彦、佐野力

いた佐野力(日本オラクル)の資金協力の元、白樺文学館の建物や収蔵品の選定と収集、また館内の展示等全コンセプトの設計を行い、白樺文学館初代館長に就任する。

2004年に自身の私塾を発展させた『白樺教育館』を創建し、小学生から大人までの全年齢を対象とした『意味論による教科の学習』と『対話方式による哲学授業(恋知)』を行っている[2]。

参議院での活動

2008年1月22日、公共哲学論争を巻き起こした武田と、公共哲学運動の中心人物である金泰昌(公共哲学共働研究所所長)、山脇直司(東京大学大学院教授)、また現職の公務員である荒井達夫(参議院総務委員会調査室)を合わせた4名でのパネルディスカッションが、参議院内にて行われた[3][7]。

この時武田が示した「国家公務員法第96条の理念を哲学的に説明する公務員倫理の原理」(武田思想)は、後に行政監視委員会調査室が注目する竹田青嗣の「公共的良心の概念」(竹田思想)と共に、『公務員制度・公務員倫理について「主権在民」の原理を徹底し公務を正常化させる為不可欠である』との意見調査書が行政監視委員会調査室により纏められている[8]。

主な思想

氏は哲学書の読解に終始する既存の哲学に対して問題提起を行っており、その実践として積極的な思想提言・発信をしている。以下に主な思想を提示する。

- ・ 氏の思想的土台として、既存の大学内哲学を批判し、人間のネオテニーとしての特性(アシュレー・モンタギュー)に着目して、『体験に基づき自分の頭で考える』という意味で哲学を再定義する為に、恋知(れんち)思想を提唱している。
詳細は「恋知」を参照
- ・ 近代西洋哲学は、キリスト教神学=スコラ哲学の改革として、デカルトに始まりハイデガーにより終焉した思想史であると指摘する。それを超える為には、近代西洋哲学と異なる発想に立つ必要性があり、同時にキリスト教等の一神教的思想世界とも決別した上で、新たに哲学的思想を発展させて行く他に無いと指摘する。古代の実存思想(アテナイのソクラテス、インドのブッダ、中国の老子)に学ぶ必要性を指摘し、それを実践する”恋知の営み”を提案している[9][10][11]。

- 人権思想について、キリスト教圏で育まれた唯一神の存在を必要とする思想ではなく、幼子の存在を前にした時の自然な愛情を淵源とする、より普遍的な思想として人権思想を再定義し直す事が必須であると指摘する^[12]。
- 日本社会における集団同調的社会風土や、教育の本質を「受験を目的とする学習」とする現状等の現代日本社会が抱える諸問題の深因は、根強く残る戦前思想にあると指摘し、厳しく批判している^[13]。明治政府が作成した、天皇を絶対的な中心に据え上下倫理に重きを置く近代天皇制(大日本帝国憲法下の天皇制)の道德観念には根本的な問題があると指摘し、この道德観念が亡霊のように現代社会に生き続ける限り、総合的判断力としての個人の理性を獲得できない、即ち道德を獲得できないとする。武田は、白樺派の文豪である志賀直哉の『こんな奇妙なものが無ければならないのかしら？天皇というのはおそらく人間ではあるまい、単に無形の名らしい。[14]』という見方を自身の思想と重なるものとして紹介し、“天皇という記号”により生まれる“タブーを含む社会”は、無意識領域まで管理され思考しない人間を生んでしまうと指摘する。この事は現代日本人の人生観や生き方にも大きく影響していると指摘し、これを超克する必要性を訴え、より善い市民社会の実現と豊かな人間性を開花させる為の実存思想として、“恋知”を思想的土台とする事を提唱している^[13]。
- 唯一神への信仰である一神教やその亜流である西欧哲学を前提とした人権思想・民主主義思想を改めた上で、“恋知”を元に天皇制から共和制への移行が必要であると指摘している^[15]。

出典・脚注

1. ^ 金 泰昌 『ともに公共哲学するー日本での対話・共働・開新』 東京大学出版会、2010 年。ISBN 978-4130101172。
2. ^ a b c 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008 年 2 月。ISSN 0915-1338。
3. ^ a b 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008 年 4 月。ISSN 0915-1338。
4. ^ 参議院事務局企画調整室 『立法と調査 別冊』 参議院事務局企画調整室、2008 年 11 月。ISSN 0915-1338。
5. ^ a b 岩波書店 (1992-08), 『世界』, 岩波書店, ISSN 05824532
6. ^ “社会人-第 58 話「街の哲学 人を動かす」”. 日本経済新聞. (2009 年 11 月 22 日朝刊)
7. ^ [パネルディスカッション「公共哲学と公務員倫理」 ～民主制国家における公務員の本質](#)

～平成 20 年 2 月 20 日内閣委員会調査室・総務委員会調査室・行政監視委員会調査室

8. ^ [キャリアシステムと公共哲学 ～行政運営の思想的土台について考える～](#)平成 21 年 10 月 1 日 行政監視委員会調査室
 9. ^ 『人類思想の三分類 「儒教・儒学」、「ソクラテス・ブッダ・老子の実存思想」、「キリスト教・イスラム教などの一神教」と「恋知』」 [1]
 10. ^ Three Schools Of Thought That Have Impacted Humans Up Till The Present[2]
 11. ^ Three Schools Of Thought That Have Impacted Humans Up To The Present [3]
 12. ^ 『人権思想の淵源は宗教ではない』 [4]
 13. ^ a b 『明治政府がつくった 天皇という記号』 [5]
 14. ^ 志賀直哉 『志賀直哉全集 補巻 5 補巻五 手帳・ノート(一)』 岩波書店、2002 年 2 月 5 日。ISBN 978- 4000922371。
 15. ^ 『私と共和制 楽しい公共社会を生むために』 [6]
-

関連項目

- ・ [恋知](#)
- ・ [竹内芳郎](#)
- ・ [アシュレー・モンタギュー](#)
- ・ [参議院](#)

カテゴリ:

日本の哲学者 | 日本の教育者 | 東京都区部出身の人物 | 1952 年生 | 存命人物

最終更新 2021 年 1 月 4 日

恋知 わたしの生を輝かす営み

第1章 天皇制ってなんだろう
私の経験から考える

第2章 恋知とは何か
Love of thinking

2013年10月9日初版

2021年2月14日新装初版第3刷

定価 980円

発行:白樺教育館

千葉県 我孫子市 寿 1-20-1

☎ 04-7184-9392

Mail: shirakaba2002@k.email.ne.jp

ホームページ:<http://www.shirakaba.gr.jp>



印刷製本:白樺印刷所 Furubayashi Tel. 04-7183-3855